川柳塔

昭和五十三年五月二十五日印刷
昭和五十三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六一三号

新連載・川柳太平記・東野大八

日川協加盟

No. 613

六月号

大坂形水古稀祝賀

川柳句集「谷町（坂・改題）」刊行記念句会

日時　53年8月27日（日）2時開場
会場　大成閣（地下鉄心斎橋下車大丸百貨店横東へ百米）
柳話　中島生々庵
　　高鷲亜鈍
兼題　「洋服」　若本多久志選
　　「鳥」　菊沢小松園選
　　「水」　正本水客選
　　「形」　川村好郎選
　　「社長」　西尾栞選
　　「坂」　大坂形水選
（席題一題）―各題二句―
会費　一、五〇〇円（句集・記念品呈）
懇親宴　二、〇〇〇円（同会場）
（幹事）薫風・史好・鬼遊・与呂志
岳人・博泉・亜成・一三夫
（本社句会は8月7日（月）6時から）

主催　川柳塔社

46版・24裁　タテ　18.5センチ　ヨコ　19センチ

川柳句集「谷　町」

約260余ページ
価　1500円（送料共）
発行所　川柳塔社

夢が広がるショッピング
近鉄がお届けします

アベノ近鉄●TEL 621-1231

上本町近鉄●TEL 779-1231

奈良近鉄●TEL 33-1111

アベノ
上本町
奈良

近鉄

日向ぼこ隣りの猫のふてぶてし

疲れ切ったらんちゅうに似た独り言

言葉の裏に人間の屑が腹を立て

倒産ときまって見つめる爪の垢

老の坂葉桜がすきと負け惜しみ

中島生々庵

無題

本誌5月号は、大相撲記事で賑わった。一三夫の後記にもあるとおり、場所が始まると、テレビの前で他のスケジュールが消し飛んでしまう。殊に今年の春場所では同郷の尾形が初入幕というのにすばらしい成績で、もしかすると優勝でも等噂されて来ると落ちつかぬ事おびただしく、とうとう千秋楽の日に難波の大阪場所で、而も北の湖と若三杉の優勝決定戦という豪華な場面に恵まれた。

優勝決定戦となれば観衆もさること乍ら、如何に横綱大関でも相当緊張するのは事実らしい。緊張するのはいいがカタクなってはならぬという言葉があるそうであるが、学生横綱を長年続けた長岡でも、本場所土俵の初日ともなるとすっかり カタク なったというから、さもありなんである。めいめいの性格によって若干の差異はあるとしても、環境に馴れる修練や、場カズを踏むキャリア以前に、人間修業というものが、極めて大切ではないだろうか。

座右の句

凧のいとのばして風にさからわず　（茗人）

私の句

申請書明るい顔の方へ出し　小林由多香

川柳塔　六月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

無題……中島生々庵…（1）
通じ合う……川村好郎…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十九）
清鈴木博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
水煙抄……正本水客選…（30）
笑いこと始め……東野大八…（23）
秀句鑑賞……（同人吟）……河村日満…（25）
……（水煙抄）……山根白星…（39）
愛染帖……橋高薫風選…（40）
53年度二賞候補作中間発表……（28）
谷町は坂だった……伊藤入仙…（44）
谷町の思い出……不二田一三夫…（45）

通じ合う

川村好郎

ある人が、旅先の友人から絵葉書をもらった。みると切手がさかさまにはってある。出したところが天の橋立。

こういう運び表現だから面白い。「またのぞきで有名な天の橋立から絵葉書をもらったら切手がさかさまにはってあった」と言ったのでは面白くない。又貰った人が、「天の橋立、またのぞき」ということを知らなかったら、小咄しにもならない。表現の巧みさと、それをどう受け止めるかによって相通ずるものが生れてくる。

川柳塔一月号に

保釈されたように出て来た鯨尺　本多柳志

秀句鑑賞に水客さんがこの句を取り上げて保釈されたとは云い得て妙である。と褒めていられるが私も同感である。しかしこの句を読む人がメートル法尺とのいきさつ、永六輔の主張のあのいきさつを知らなかったら、何の変哲もなく、作者と読者の

絶筆……小浜牧人…(43)
紙ひとえの句……若本多久志…(22)
路郎選古川柳の味……八木摩天郎…(51)
加藤貞山喜寿祝賀川柳大会……小浜牧人…(46)
一分間の柳論……安平次弘道…(57)
雅号ぶっちゃけばなし……稲田豊作…(53)
初歩教室……小谷仙山…(59)
大萬川柳「離れる」……本田恵二朗…(50)
柳界展望……川村好郎選…(52)
本社五月句会……(庸佑・整理)…(54)
各地柳壇(佳句地10選)……(58)
「梅雨」……川竹松風選…(60)
一路集「定刻」……森田カズエ選…(48)
「アルバム」……森田布堂選…(48)
編集後記……藤井春日選…(49)
……(一三夫・葉子)…(67)

座右の句

泣き声になった電話は切りづらい　(はやと)

私の句

雨垂れの窪みにさとる独り言　神田秀峰

間に通じるものがない。

川柳塔四月号に

明日の灯へ鳴らしてあるく母の鈴　八木千代

路郎賞候補句へ私は何の躊躇なくこの句を頂いた。うまいの一言に尽きる表現である。

千代さんの御母堂は手厚い看護を受けて、逝去された。千代さんは情愛のこまやかな、そして親孝行の極めて厚い方で、これまで老母を慕い祈りつづけられた佳句を発表されている。この千代さんのやさしさ、お母さんの他界を知ってこそ、この一句が生き作者と読む者に一層こまやかに通ずるものがあると思うのである。

川柳塔四月号に不二田一三夫氏が「同人の方々は、会社でいうなら株主である」と仰っていられる。それこそ云い得て妙である。果してこの一言を聞くもの、われ川柳塔社の株主なり。自分の川柳塔社であると自覚しているだろうか。この自覚あってこそ相通じるものがあり、物価高騰を乗り越えて、更に発展前進し、いよいよ川柳の道に喜々として邁進出来るのではなかろうか

川柳塔

西尾栞選

大阪市　小出智子

にぎりめし母の祈りのかたちして
春ほどに真正直に生きられず
鏡拭く私を偽らないために
順番と言うさみしさにやがて逢う
人を指す不遜な指ももちあわせ
父の死は哀しい詩にさえならず

岡山市　時末一灯

竜頭巻いて明日も連載書くとする
誘うて来て沈黙を持てあまし
嘘をつくより白旗を出すとする
ルームランナー二十日ネズミも思われて
裏側で測ればきっちり合ってくる
手造りの味か銀婚式間近か

東京都　山根白星

代役は気丈嫉妬のただ中に
第三者からは天寿を全うす
風情いまあたりはばかるとこを読み
トルソーの如き兵士にした戦史
会葬の虚しはんぱな午後となる
出生の疑惑少女の思い過ぎ

大阪市　神夏磯道子

繭の精絹の衣で眠ります
決心の禁酒ぐらつく活造り
変身をすれば楽しい更年期
だっこした子がもてあそぶイヤリング
虚しい日激しい雨に救われる
誰にでも喋りたくなる合格日

東大阪市　市場没食子

忙殺の春寝不足で西東
中一の孫に背丈は早や抜かれ
慶弔の膳がつづいた腹工合

近所へも気兼ねする程留守し勝ち
不況風よらば大樹の影ゆらぐ　神戸市　小浜牧人

遺句

大樹一斉に芽吹き少年進学す
母の情で扉はいつでも開けてある
足踏みがいつまでつづく係長
監督の孤独へきつい風当り
シャネルの香とすれ違うもよし春の宵　岸和田市　高橋操子

生きのびたいのちしみじみ春の風
しびれた手なでてぐちって見とうなり
春風に乗ってみたいとシャボン玉
日を拝む事を忘れた日のおごり
孫やはりママの子それでよいのなり　大阪市　不二田一三夫

桜満開坐わるとこなし一人来て
口で割る箸へうどんの早いこと
畳替え監視されされタバコ吸う
老人の毒舌　彼も淋しいか
金すこし持って帰った父の声　八尾市　高杉鬼遊

春爛漫チューリップはみな孤独
右ひだり雀の夫婦うまく逃げ
矢印の向うで死者が待っている
ねぎ坊主成田は遠いとこで燃え
新仏手に持ちきれぬ花を抱く　大阪市　本多柳志

今日からの彼岸へ弾む般若経
この春に会う倖せを彼岸寺
金婚のまだ開けられぬ玉手箱
四つ子生るニュースバリウもない見出し
ストのビラ捨ててトルコを握らされ　倉敷市　水粉千翁

七色の見栄の行方のシャボン玉
ふるさとのあの日をそこにすみれ咲く
人間を見飽いた檻の目に出会い
忍一字たしかめました重さかな
飼われてるとは鈴の音は言いません　尼崎市　黒川紫香

尾がとれてからの蛙は雨を呼ぶ
底減ってからが自分の靴になり
また喧嘩してると隣の子供が来
ふところの財布の方が落ちつかぬ
恋しても年寄りだから笑ろて済み　川西市　戸田古方

輪郭を描かない方が春の雲
造成地ここのパン屋も今日休み
裏の家の子供の凧見鶏も春
まだ旅に来ているような新居かな
その当座蒲団も上げてみる新居

大阪市　河野君子

春霞私の眼鏡へたなびいて
花のみち友は重たい定期持ち
孝をいくつも書いて冷えがある
待つことになれた女で世に疎い
二十三時の茶漬へ物言いつけておく

富田林市　岩田美代

真っ青なえんど剝く指恥じている
生活の掌拭いてもふいてもくらしの手
風五月褪せた考え干して見る
コーヒがおいしい芯から腹は立っていず
まだ今日があるのにドラマ切った春（知人の死）

鳥取市　河村日満

口癖の中にいくさが生きている
定年のそれから癖の昼の酒
好きな娘をつくれと世話をぼかしとく
病院の位置が見舞いを遠のかせ
ハイヒール脚を斜めに見せる品

八尾市　香川酔々

ルナールの手帖に虫の呼吸音
竹馬に乗ってる立場見る立場
都からユーターンして乳しぼる
王様のルーツ不問にしておこう
倦怠期火口のぞきに出掛けよう

竹原市　山内静水

土手を焼く煙の中を踏むペタル
御撰米もったいなくも歯にささり
楽しみに作ってますの売りますの
よそものの鯛すげ笠を身にまとい
生き甲斐は金にならないスケジュール

米子市　八木千代

無為な日を過せば鳴らぬ母の鈴
止り木も落して雁の通うみち
えびすさまに釣られて鯛も神になり
これからの坂へ気になる靴のひも
巣立せて広角レンズ手離さぬ

米子市　林瑞枝

派手に着るそんな勇気で若返り
あせる気をお茶で落付きとり戻す
氷山の一角洩れて揉めに揉め
語りつぐ小さな歴史孫を抱く
散り急ぐ花の生命の華麗なる

八尾市　宮西弥生

決断を迫ると男呑むはなし
箸枕くずれて道草帰えらない
ソバカスが眼立つ鏡の位置かえる
学歴の順番はない応接間
この橋を渡れば日帰えり狂うだろう

八尾市　高橋夕花

春の冷え突如息子の独楽止る（次男左足骨折）

五分咲きも満開もなく子を看取り
つまずいて有情無情の人に会う
生きてゆく姿勢を変える節にいる
空白の日記　落花盛んと書き始め

今治市　月原宵明

さくら見る群れに失業者もまじり
観世音春の埃りを浴びて笑み
かたくなな老いのペン字の右下り
さくら散る木魚のリズムとは合わず
五分程待たす演技の喫茶店

桜井市　岩本雀踊子

あきらめをためてる女の目が笑う
雑魚になる男で言葉すてている
五指で足る過去を女がふり返える
裏切りの女に光る針の先
針のめど女の歳を知っている

青森市　工藤甲吉

恐ろしやボタン一つのかけちがい
捨てた神拾った神に叱られる
おみくじの大吉はまた嘘をする
野良犬も男やもめを振り向かず
少年は一気に坂を駆け上がり（孫・伸・高校へ）

倉敷市　田垣方大

火葬場の合理化泣いてる余裕なく
理解ある父と信じている甘さ
さんづけにする程妹も老いぬ
春の雲ゆっくり塔が移動する
東京で道を聞かれて嬉しがり

和歌山市　野村太茂津

越後から嫁いで訛るおけさ節
せめてもの心遊ばす故郷の民謡
小癪にも勝てぬ小節へ妻の三味
声だけは良いとは音痴へ賞め言葉
民謡の出だしのハァーに嗄れてゆき

大阪市　中川滋雀

だし雑魚の意地は乾されて堅くなる
だまされてみたい邪心を覗かれる
花活けて忘れる恋が赤すぎる
ぬぎ捨てたドラマの女が夜を作る
見ててやるだけの愛なり父はいる

倉吉市　奥谷弘朗

椅子机ちゃんと格差のある役所
町内の退屈男の名で通り
お茶席にふなれな客もいてなごみ
口ぐせも内助の功として許し
本当に君の筆かと憎いこと

竹原市　小島蘭幸

孤児ついにユーモア作家とはなりぬ
お日さまと僕の裸体は絵にならぬ
献血をしてビフテキは喰えませぬ

メニューのぞくとてもまじめな顔がある
コレクションばかばかしさが受けている

竹原市　森井菁居

ワイングラスへ敗者の私語を葬るか
へこたれなさんなと一本杉が言う
カレンダー罠の在りかを教えない
男坂卑屈になれば僕の負け
逃げ道を考えている紫煙の輪

泉佐野市　阿萬萬的

孫三つ三つになった笑顔する
パチンコ玉値上げに闘争ストもなく
越後路のうた薄墨で屋根を描く（日展を見て）
氷の下の音を見つめる画家ひとり
血統をほこる仔馬にあるポーズ

兵庫県　遠山可住

十八の笑顔あしたを急がない
他人にあげるやさいへせっせと母の汗
値切られる時間を金持ち知っている
冬の目が起きてイチゴの赤に会う
父らくしない父わびて靴を履く

松江市　柳楽鶴丸

社会面見て五右衛門笑ってる
完全武装ブーツGパン革ジャンパー
信号青ヒットラーを思い出し
盃をぐい呑みに変えて唖になる

流行を着ても同じ影法師

松江市　小林孤呂二

少年の涙はひと雫くずつでない
母さんの嘘が暮しを支えいる
百薬の長とかよくもつづく夜
磨いても石は石なりの艶である
一円の貯る重さを佗しがり

西宮市　藤村〆女

控え目に控え目になる母も齢
口きいて見れば興味のない女
形身わけ手の平ほどの土地でもめ（義姉逝く）
遠慮しているがほしいと言うてる目
無遠慮な人に着られる形見わけ

守口市　羽原静歩

フランス・スイス紀行

山は神々に似たりアンカレジ（フランス編の中）
瞳のまわる観光ルーブルの絵がまぶし
ベレー帽吹き飛ばされそう凱旋門
ジュネーブに菩提樹ありて気がなごみ（スイス編の中）
モンブラン風は切々声を呑む

岡山県　嘉数千代香

口下手な友が涙を拭いてくれ
目を閉じて雨はこころの中に降る
信ずるより外なし洗濯白く干す

生き恥じを三面鏡に叱られる

八尾市　大路美幸

ねんねこのぬくみを男断ち切れず
手品師の鳩に大きな空がない
樹の私語を聞こうとしないブルドーザー
風船のふくらむ明日を子に賭ける
土に生き土に果てたる大きな掌

倉敷市　稲田豊作

我武者らに何かやりたい朝である
一徹に気づいて洩らす苦笑い
玉の肌という日もあったサロンパス
天下安泰　臍くりのある女
隣りとは不和で猫だけ遊びに来る

富田林市　和田維久子

一枚の遺影が縛る寡婦の日々
四十まだ責任持てぬ顔で生き
その幻影重なり美しい夢として
運命線信じた過去にある喜劇
百花繚乱老を捨てよと春の風

和歌山市　西山幸

さわやかな訣れで始まる旅の手記
大詰めは明るい嘘でしめくくり
竹光で軽く鉾先かわされる
彩のない時間を見てる午後の椅子
書き出せぬ白い手紙が胸にある

伊丹市　樫谷寿馬

鉄斉に男の好きな赤がある
初めから欺すつもりの玉手箱
盗人の夫婦も寝たという古墳
抽斗の日記眠れぬ夜もある
三十年目も二拍子で行進自衛隊

寝屋川市　江口度

引き汐の舳先は岸を向いたまま
悪だくみ運命線がうすくなる
バーゲンで月夜のかにを買わされる
耳痛い言葉を貰う花盛り
かまきりの勇気うっかり賞められぬ

大阪市　室谷徹舟

通夜の席義理の弱みが隅に居る
母の骨ただ黙々と黙々と
一と月に葬式二つようやった
母死んで身内に明治居なくなり
品物のように永眠扱われ

倉敷市　野田素身郎

左遷も可桜並木の通勤路
桜散るあの娘もこの娘も過去の人
人事異動またまた立場逆転す
こんなに飲むとは知らず女の子を誘い
息子よ　父はなんにも言わぬけど

富田林市　板尾岳人

登山口切符売場に置いてある
雪消えし峰からわらべ唄聞こゆ
山男一樹一樹へ話する
滝氷柱金剛山を守りけり
春が来て金剛山は無口なり

大阪市　大坂形水

妙なのも混るたわいのない勲章
テレビばかり見てる父親見て育ち
入院を伏せているのに見舞い客
どっちみち泣きにくる筈ほっておく
外向けと内向けがある決算書

愛媛県　渡辺暁童

立川文庫の　智恵で村長
酒無きときく　点晴を欠く
大中小と　祝す入学
すぎた虚勢の　赤のネクタイ

高槻市　若柳潮花

綾部山古墳を包む梅の白
梅を背に自動シャッターの切れる音
派手に着て五十の坂を染める髪
蹴り込んだ石の波紋も春の渦

藤井寺市　児島与呂志

こらえてもうれし涙は拭ぐはない
春の陽に子供の声だ叱れまい
老いの背は弱身をさらけ出して生き
神がかりみたいな手段に騙される

新宮市　大矢十郎

寝たきりを起こす五月のふれ太鼓
出すための名刺を出せぬ日の多し
若い巡査拇印へ指を添えてくれ
十九から十七　十五が恐ろしい

西宮市　島居百酒

ニュースバリュー凡夫に優る名馬の死
円高が気になりだした小株主
相槌も打てず否定もせず煙草
当てにせぬ遺産があって本家無事

鳥取市　小林由多香

めでたい日犬もあやかる鯛の骨
スタートの狂い半生を棒にふり
税金がちょっぴり減った左遷の地
うそを真に受けられ用件言いそびれ

米子市　小西雄々

気まぐれと思えぬプレゼントが届き
ハガキから手紙になった恋心
病人の口ぐせだからさからわず
縁談にヒップはすでにもつ丸み

島根県　藤井明朗

愛妻の風邪うつってもよし口づけ
もうこれで逢うてはならぬひざまくら
女文字少し乱れて金の事

呼鈴を押して呼吸を整える

大阪市　川口弘生

物わかりのよい人にする過去の傷
鼠追う猫に象まで走り出し
戦災の身代りだった僕の雛
蟻の塚蟻一匹の物でなし

大阪市　金井文秋

いつまでも達者が罪で子の甘え
戦利品のように外孫持って去に
放任主義悪のめばえを摘み遅れ
販売機が好きと対人恐怖性

宝塚市　傍島静馬

何歳なら天寿を終えたことになる
図らずもカネの力でとは云わぬ
歯に衣きせねばものが云われない
ずけずけと云うてシコリを残さない

島根県　堀江正朗

いい知らせいい方の耳持ってゆく
見えぬから見られる角度気がつかず
娘の電話妻るすのときあっけなく
崩されぬ正座　男の意地があり

島根県　堀江芳子

手をつなぐ夫がいるから朝の意気
体験という収穫のありがたさ
つまずきに生きる尊さ教えられ

孫ひとり増える喜び桜咲く

寝屋川市　宮尾あいき

野崎まいり私に恋があるでなし
花見がてらの参拝観音知ってはる
金がからんで母娘の絆ゆすぶられ
寝物語り五つの孫が御相手で

堺市　藤井一二三

辞令一枚家族を分けた西ひがし
栄進と見える名刺の国訛り
辞める身も残るも地獄肩を抱く
人間の弱さを神に掛けた弓（屋島にて）

藤井寺市　西いわを

情念は一人歩きにとどまらず
見比べる女の性は不しあわせ
少年の心捉えた森の中
鉛筆を削り終って木の香り

神戸市　中村ゆきを

母と子に花びらかかる車椅子
抵当の庭の桜がまた見事
両の手でグラス温める日の叛意
家背負う少女の胸にマリア像

枚方市　宮川珠笑

融通をきかしてくれぬ電算機
悪いとこないと薬をくれる医者
扇風機向うむいてるうちに喫け

入れ知恵がすらすら増幅してしゃべり　下関市　国弘半休門

半端もの集めてママのアイデア
新幹線スト雪地震停めて待つ
縁無しの自動ドアーで頭打つ
猫に鈴付ける話題で逃げたがり　大田市　藤田軒太楼

筆頭は名ばかり世帯におんぶされ
決断の鈍さを中間派にとられ
神官の葬送鯛で祝われる
亡父の癖歩く姿にまで貰い　天理市　岡崎祥月

なるようにならぬやっぱり金や金
修養へ財布は口をしめたまま
はっぴ着た姿心が引きしまる
信仰にラジオテレビもみな忘れ　鳥取市　両川洋々

満身創痍そんな夫婦でする再起
みごとなる嘘だ花束送ろうか
絶叫もポーズか公約空を切り
裸婦のポーズへ芸術でない目も混じり　松江市　恒松町紅

汽車の旅子なき夫婦のワンカップ
うっかりと女恥じらす目のやりば
もったいないものを捨ててる年度末

勇退などと男のエゴがある　堺市　高橋千万子

花うりが色をこぼして春の風
春四月自慢話が多すぎる
マージャンの座を人事が動いてる
淋しさをまぎらす浪費とは知らず　米子市　石垣花子

悲しみを別ける姉持つ友へ妬け
古傷にふれず再婚同士住み
大都会の恥部早朝の飲みや街
制覇した七つの海からしめ出され　倉敷市　藤井春日

うす汚い金で御殿に住んでいる
亡母の声やさしく強く生きとくれ
美しい秘めごと抱いて女生き
人並の暮しと見せる妻の知恵　鳥取県　鈴木村諷子

六地蔵村の歴史を話し合い
気休めと知れて会話が宙に浮き
男は膝に女は胸に埋めるもの
ブドー棚なぜ人間はにくみ合う　東大阪市　落合思月

一ランク下げて年金細々と
媚を売る職で故郷へ遠く住み
棚釣ってやって鋏も研される

若い気で居ても猫背をかくされず

柳井市　弘津柳慶

金利下げて議員の歳費値上する
孫抱いてコマーシャルソングになっていた
聞いて下さい内の子だけをいじめます
白髪染妻と一所に染め上り

大阪市　神谷凡九郎

生きて居る死ぬとは一寸も思わずに
どどのつまりがお互い人間だったってこと
嫌になりません貴方御自分を見ていたら
流れ星のように人間は消えられぬ

高槻市　福田丁路

明治から続く命のおらが春
人間のああ人間の強慾な
湯が馨る有馬の山に雲が這う
黄昏の鐘に合わせて散る桜

倉敷市　小幡里風

遠慮などするなと番茶であしらわれ
指の先少し笑うて点字読む
一番を守り通して父がない
その角度社長の欠伸うつされる

大阪市　山川阿茶

医者の病気楽観したり案じたり　（眼を患う・一句）
今になり自分に火をつけどうする気
愛人と波長の合わぬもどかしさ

アレルギーくしゃみで知った沈丁花

島根県　小砂白汀

十代や瞬時もじっとしておれず
痩せ滝の肋をえぐる冬の月
オシャブリを舐めさせておくきれいごと
凍っても水より逃げ場のない魚

平田市　久家代仕男

隙見せぬおんなにあった泣きどころ
ここまでの話襖を筒抜けて
おとぼけを見抜ける鸚鵡喋り出し
遊園地春の広さに暮れかかり

島根県　栂みどり

虚勢はる素振りも寡婦の彩を捨て
篭の鳥翼忘れてなき続け
一日の終り灯明じっとみる
もえつくす火に七色の花求め（秋葉窯にて）

大阪市　江城修史

労働歌五月の風に驕り出し
耐えて生く妻よ君こそ吾が命
夜桜に女は隙を見せざりき
氷雨行く旅にも温くき夫婦愛

松原市　玉置重人

運、鈍、根、鈍は変心などはせぬ
葬送譜今葬儀屋は煙草の輪
美女の血になるかも知れぬ献血車

香車と香車話がはずむ炉ばた焼き
三重県　川上大輪

話し上手で女は齢を盗まれる
折鶴の何羽折っても飛び出せぬ
花束を抱いてもピエロのままでいる
人生の余白夫婦で茶をすすり
松江市　中川晃男

祖母・母・娘女系家族の雛伝う
雛祭り雛のあるじは乳を飲み
結末は知らず我は愛すのみ
神明に誓って嘘を申します（ロッキード）
呉市　槙田英詩

尊敬はするが父さん古くさい
ストレスも理性があって発火せず
神様の敷いたレールの運不運
母亡くし男結びの帯を締め
泉大津市　村上春巳

潮騒を砂風呂で聞く旅情
老人のバッテン言葉に旅がある
カーラジオ明日もお天気日向灘
方円の器にしたがい停退す
姫路市　梅谿庵不酔

不景気に遠い先祖の墓拝む
掛け替えて決裁判を押す眼鏡
地獄から帰ったように坊主説き
デモデモと女なかなか強いです
大阪市　黒田真砂

ファッションショウ春のリズムで軽く舞い
真実を明かせば女背を向ける
人生のはぐれ鳥かと思う日も
声限り叫ばん過去に袂別す
岡山市　川端柳子

健康な笑いと競演するさくら
おしゃべりも逃避も出来ず額の人
タレントの名覚えのわるい夫婦です
孫台風去って二日目の昼ね
西宮市　若林草右

前線で花を咲かせる気象庁
老の春プラットへ花びら散っただけ
遠耳がクッション吾が家の春静か
蒟蒻の使命がやっと分りかけ
京都市　松川杜的

一日の疲れサイフォンの色に消す
戸惑いながら花冷えを沈丁花
春宵一刻蠟そくの灯を点す
すんなりと泣けて子役の芸どころ
京都市　都倉求芽

持病にはお医者さんなみの口を利き
殺虫剤の噴霧器に怖い虹が出来
珍客へサイフォンの豆匂うてる

耳くその大きさに暇つぶし満足

今治市　越智一水

めずらしい花を貰って来るも春
作業着のままそれでよし花見の輪
花便り国鉄さんに教えられ
女ひとり崩れてみたい春の宵

東大阪市　竹中綾女

思いきり一人で泣いて寝てしまい
日帰えりの旅で泣かずに帰宅する
亡夫植えししぼりの椿今盛り
マクロードのアクション小気味よく進む

鳥取県　森田布堂

呱呱の声から人生待ったなし
刑務所で金庫破りの手を覚え
合成石材先祖代々之墓
焼香の煙にむせる慰霊祭

和歌山市　津田与史

年金では孫に貫録示されず
朝の喫茶店で憩うぜい沢だけ残り
ええことおまへんかそんな日が続く
春雨に濡れるロマンに遠く住む

大阪市　天正千梢

落花の風情弱い者にわびたくなり
人間研究空中分解してしまい
豊かさの苦悩城を脱出し
静かな爆発一冊から感じ

美弥市　安平次弘道

それぞれの趣味に打ち込む倦怠期
犯されず犯さず孤独な団地の灯
併せ呑む清濁　濁が身を崩す
口裏を合わす友情なんか止せ

氷見市　関美子

雨の輪にまた輪を作る仲間の訃
冷や水と言えばそれまでランニング
ハイヒール颯爽条件と結婚するために
七色まで見えずともよし虹の橋

宇部市　平田実男

勇退の記事へ本人苦笑い
鏡見る時だけ母の座を離れ
子が言うた通りだけれど叱っとき
ロッキードチャンチャカチャラで終りそう

東広島市　高橋鬼焼

風も春明日の鎖をみがかねば
末席の妻と反旗をにぎりしめ
母と子の童話をのぞくまるい風
一行に女の夢が書いている

橿原市　岩井本蔭棒

駅員も運賃高いなと思い
小鳥みな寝かせて大樹星仰ぐ
道化師が真顔にもどる妻子の灯

老醜へ追い討ちかけて歯が抜ける

笠岡市　松本忠三

愚痴ひとつ言わない妻に借りがあり
俗名の一字を入れて居士・大姉
検討に値いしますとそれっきり
バス停で荷物を持てば回送車

出雲市　原独仙

転作の麦久方に揚げ雲雀
血圧の老妻を残した一人旅
人口過剰どうする誘発剤
左遷地は少さな罪の捨てどころ

柏原市　大峠可動

詩に飢えて父は軽蔑されている
一歩から生れて貧富の差を背負う
苦も楽も世間話の海で死ぬ
顔の皺手の皺生きる道つくる

大和郡山市　森田カズエ

燃えた日のネガ大切に寡婦生きる
さぬき弁うどんの湯気にのってくる
底辺に生きて情けを嗅ぎ分ける
草踏んで通った尋常高等小学校

大阪市　河井庸佑

知っていて何も言わぬから不気味
新入社しごく手段を考える
上には上ある世の中をしかと見る

新入へあれこれ文句多すぎる

生駒市　草深酔升

億の桁万で死ぬ人さえあるに
悟りだけ求め憎しみ捨て切れず
転んでも摑むものないアスファルト
肩書が無いから言いたいことが言え

東大阪市　本多清人

終電に間に合う寿司は喰べ残し
クリームが売れてる売れてる砂ぼこり
三度目の妻がきれいでうしろ指
ついてない人生意地が宝です

諫早市　原田明春

帰省娘の首輪のようなネックレス
給料の端で飲む気が梯子酒
去る者は追わず独りの梯子酒
安月給皆桁はずれのウインドウ

和歌山市　若宮武雄

性善の自分信じる花の下
もめている仲の小犬はじゃれ合うて
舌打ちも出ない日暮れの行詰り
あの時に挫けていたら今がない

鳥取県　川崎秋女

一言をたたんだ胸の鼓動きく
あきらめと怒りが同居ゆれる胸
蟻の家退屈の語は見当らぬ

極楽に行ける切符を買っておく
米子市　増田竹馬

倖せな鯛は恵比須さんに抱かれ
ジーパンが今日変身のお茶点前
招かれた茶席で手形が袖を引く
元バンカー石橋叩く後遺症
和歌山市　内芝としよ

夜桜へくどいて見たいおぼろ月
怪我をして無用の指がない悟り
惚れた仲お客の顔して逢いにくる
しぶちんへ滅法派手な嫁がくる
大阪市　横地雅風

捨てられたごみに路傍が痛たそうな
耳塞ぐ政府へ豊作祭り歌
スト解除怨嗟と排ガス置いたまま
過疎の水何よりうまい初夏の旅
兵庫県　大江秋月

二年目の恋が実ってゴールイン（長男幹雄　四月十日結婚）
花嫁の母の涙を見逃さず
御近所の好意が染みる目出たい日
大安の酒はいいもの味でなし
大阪市　柳原静香

低金利気にする割に貯めていず
三色すみれ名もなき路地を春にする
春や憂し膝の小猫もみごもりぬ

耐えることに馴れて母の背の丸し
島根県　太田亀甲

金婚に苦労しました総入歯
四月馬鹿知らず相槌打っている
そこまでは云うなと妻に目で知らせ
夜の橋もたれた女気にかかり
東大阪市　桑原喜風

札束に悲喜交交の指の跡
ご近所に来ても寄れない訳けを持ち
心から述べる愛の掌血も通い
年寄りの世話も吾が身にかかる雪
岡山県　竹内翁童

雨しょうしょう春の息吹きを呼び寄せる
口実のお見舞で来たショッピング
一票の行使へ空しさつのらせる
スタートに並ばすように入社式
玉野市　小谷仙山

男涙こぼして嘘が言えますか
口よりも腹が承知をしてくれず
仕事仕事桜は待っていてくれず
そらとぼけ其の場の空気やわらげる
大阪市　那須鎮彦

父に足向けて平和な子の寝顔
英語の先生が道徳心教え

妻の手を引いて歩いた通り抜け
九回の裏に男の賭けを見せ

鳥取県　林　露杖

喝采のかげに敗者の呪詛がある
屑篭の折鶴羽根をたたまずや
嗚呼夫婦異状乾燥注意法
沈丁花不倫の噂さ耳にする

宇部市　平田実男

娘の入試妻の生理まで狂わせる
一級か二級か解らぬ舌でよし
腫れ物より乙女心は触れ難し
医者と縁が切れない方が長生きし

大阪市　本間満津子

音が描く景色の中に居る私
うつらうつら方言親しローカル線
そのときはそない思うた日記帖
春うらら電話かけたら何処も留守

兵庫県　河原みのる

経済閑僚あした首吊る顔でなし
コレステロールやきもきすまい肉や鮭
監督のヘルにツバメの糞が落ち
辛夷点々確な春を里に告げ

宝塚市　小畠無聖

眼帯の奈落の底で心痩せ
手さぐりは朝の光を深く吸い
淋しさは母のない娘につき添われ
庭に立ち花の香りのいのち抱く

鳥取市　大塚豊生

浮世絵のポーズ妻の洗い髪
君が代に襟を正して吾子巣立つ
家計簿を空っぽにして子ら巣立つ
祝い鯛大見得きって膳に載り

大阪市　津守柳信

せめてもの抵抗うしろ向いて寝る
斗病へ桜前線北上中
忘れてた女らしさをチューリップ
なるようになる人生にあるもろさ

貝塚市　行天千代

子育ての過ぎし時代の懐しく
サイネリヤ一鉢炊事場春になる
過去の人想い出させるおぼろ月
煙草の香残して息子引揚げる

米子市　佐伯越子

里帰る子等を迎える鬼瓦
冷ややかなヴィーナスほほえむ雪祭り
童顔の姫だるまも入れ嫁に行き
嫁自慢何時まで続く事か知ら

和歌山市　松原寿子

打ち明ける想いは振り子止めてから
とこしえの絆心へ虹を織る

コバルトブルーへ心の気流消えてゆく
逢える日へリズムが揺れる花時計

寝屋川市　柴田　恵美子

ちょんちょんと云って貰うと調子づく
春の宵静かに墨などすってみる
半眼のご坊も春の風を知り
バーバリに男のロマン包ませる

京都府　間嶋　青丹子

スピーチへ知ってるだけの美辞麗句
名前だけ部長という名に甘んじる
春の土手土筆見つけた声はずむ
子の手紙あとでこっそり読むとする

奈良県　松田　宇宙太

手折らねば花の使命が果せない
裁かれに来たに土産を持たされる
風見鶏風の中心部をえぐる
花鋏花に戦のある限り

桜井市　河合　茂雄

坂の上に立っても雲は逃げていく
九分九厘他人の智恵で来る示談
掟からはみ出す私は未だ若い
この道も父が歩んだ七曲り

鳥取県　清水　一保

円高不況桜は桜咲き誇り
衣食住足って人道疎外され
一円の価値一円は清く果て

神戸市　仲　どんたく

寝ぶくろと漫画本ルンペン貴族かな
誇高き男の音に書生下駄
六段の調べで春を出勤す

東大阪市　斎藤　三十四

金髪の英語鹿は知ったふり
沈黙の上を叱言が通り過ぎ
就職は駅の桜に送られる

大阪市　神田　秀峰

電卓へ段々思考力が減り
旅立ちぬ独り娘の新世帯
子宝と云って餓鬼とも云う或る日

島根県　大森　孝華

制服へ母の視線はぬれたまま
流れ星看取る涙へ予感揺れ
第三へ続く人生趣味に生き

島根県　錦織　文子

地下足袋へ昨日に続く朝があり
表札へつましく生きる女文字
ことわざは嘘でなかった春彼岸

和泉市　西岡　洛酔

青春の謳歌がまぶし老の目に
積む石の一つに慎重老いに生く
愚痴っぽく成って足腰痛み知る

未練持つとき時計遅れだす　竹原市　時広一路

背伸びすることは知らない石である
風船に詰めた虚勢が洩れてくる　大阪市　西川誓二

春の流行を探りに行く三番街
他人の口我が家の痛いとこを突き
衆生掬い給うみ仏の掌の広さ　守口市　野呂右近

現在が幸せだから許す過去
母の智恵その侭孫が電話口
体面を捨てて身軽な朝を出る　唐津市　新岡回天子

若い過去私にあった赤い主義
善人を叩きつけては客おさまらず
赤い旗振らない僕に皆疎縁　岡山県　出原敬一

蔬菜の部受賞の背広ぎこちなし
大砂丘押す山陰の波がしら
こうるさいのへ妻心得る大根すり　出雲市　高橋可保留

俤がうすれた恩師の酒の量
母の眼に娘の信号見届ける
バーゲンで意外な人に突き当り　島根県　飯塚虎秋

受話器からとどく娘の春孫の春
歩道橋世の濁流を見て疲れ
治るまで別居してはと女医厳し　大阪市　北勝美

丸めても心は鬼になっている
剃刀は自分の弱さ知っている
剃刀は冬の三日月見つめてる　竹原市　鈴木かつ子

石段に運動不足を教えられ
散りぎわを責めまい四季のない造花
外孫がやっと笑ったかえりぎわ　東大阪市　崎山美子

目標へ親子の意見がくいちがい
運のない男に妻もみきりつけ
負け犬は運命呪うしか出来ず　倉敷市　斎藤通風

家計簿知らぬ男の天下論
杯の廻し飲みにも重圧感
座して食い寝て食い米はなお過剰　七尾市　松高秀峰

人間を長くしていた人の顔
出世して人相までが変って来
左遷でもよし地元の長で来る　京都市　山本規不風

善と悪神様同居認めてい

可愛いらしい老人会にはなり切れず
肉親に縁薄き子の家系守る

滋賀県　溝口はやを

村選挙お茶という酒のまされる
村選挙事務所は赤い顔ばかり
げろげろと蛙が笑う村選挙

岸和田市　島崎冨志子

やせるよな思いをしたにやせもせず
子に託す夢の広がりたしなめる
生きている証しのように胃が痛み

鳥取市　北村三歩

年金の記事熟読するも年令
賛成をしたわけではないが寄附を書く
赤い羽根、緑の羽根もつけぬ意地

岡山県　直原七面山

肌を這う愛撫の手
石女(うまずめ)の柔き肌

本田恵二朗

メロドラマ嘘と嘘とがからみ合い
タンカーを浮べて海がすすり泣く
無理押しが少したったとも云えず
旅慣れた居眠り降るとこで降り
天職のクリーニングを思いたち
春はみな二人のものと肩を組み

尼　緑之助

おしゃべりのいつまでつづく子の自慢
成長の後を円高かきまわす
円高のメリットあれこれ霧の中
しわ寄せは庶民成田に道がない

菊澤小松園

鬼灯の赤さは女かも知れず
堪えるだけ堪えて来ました女です
さりげ無く女の力になってやり
十七の青春ベッドの上にない
掌の中で乳房の片ちんば

若本多久志

排ガスの中に寂しく芭蕉の碑
食べたいものが一つ減り二つ減り
晴耕というにはわびし花いじり
情報の渦　不読の権利あってよし
今様の言葉にムッとするも老い

川村好郎

関係のない振りして男酔うた振り
去るものは追わずときめてまたひがみ
ありがとうぐらいは云え自動改札機
割烹着のままの焼香に見る涙
この齢で働ける朝の軽い靴

伊豆大沢　正本水客

古さだけでない湯の宿の暖かさ

障子張りの玄関を一歩歴史の中にいる
蔵座敷　山の稜線うつくしき
総桧造りの湯があふれ湯が溢れ
四本杵の餅搗き客の声まじる

橘　高　薫　風

海鳴りへ標本室の貝の耳
花冷えは処女の両の乳房にも
純情な黄色い花の黄の花粉
愚の酒で愚の骨頂となり給え
わが憩い今にモンロー・チャスラフスカ

伊　藤　茶　仏

実相に押され春闘旗を捲き
五十翁謹粛明治は偉かった
コピーした札で一生棒に振る
外交の秘話は踏んだり蹴られたり
偉い人だった朝夕掌を合わせ

浜　田　久米雄

寝つかれぬ夜の角度を変えてみる
いくらでもあるのに時間がないと去に
さらさらと流れる水に似て暮し
春の夜のこんな時刻に句が練られ
足跡はつづく行手へ手をかざし

西　尾　栞

したたかに酔うて寝てよし花の下
花吹雪じゃんけんぽの五六人
花の下河内言葉を丸出しに
競宴になるも亦よし花莚
ドサ廻りの幟の村の花曇

紙ひとえの句

若　本　多久志

長期の療養で肉体的にはだいぶん回復したように思っていたが、川柳塔四カ月の誌上約二千五百句の作品から、十二句を選ぶ作業をやってみて、神経系統の回復がアンバランスになっていることに驚いている心境である。つまり忠実にやろうとすればするほど疲労を覚えるのである。のみならず、その選後感に於てスッきりした快感を味わえない。

私はいつもこの中間選では、原則的に各号から初選で平均七句を頂き、再選で二十句ぐらいに絞り、三選目で初めて作者名を明らかにして同人でダブッてる句がある場合、その内の一句を除いて残句から最後の十二句を誌上発表句として編集部へ送っている…この方法の良否は作者のご判断に委すとしても、今回のように精神的不健康の場合、選句が果して最高のものであっただろうかと、忸怩たる思いに駆られるのである。その意味で茲に、選洩れの所謂〃紙ひとえ〃の句をご披露して作者各位のご批判を乞いたいと思う。

百円玉借りて返して嫁姑
捨て猫が人を信じぬ顔で寄り
一つ覚えの道しか知らぬ靴を履く
大寒よ尿の頻度に耐えて生き
通り雨に似たボーナスの味けなさ
衣食住足って心をもてあます
金のない紳士は載らぬ紳士録
幸せな人　幸せな愚痴を言う

川柳太平記 (1)

笑いこと始め

東野大八

昨年の今ごろ、わが国のマスコミが祭りのタル御輿よろしく、大いに担ぎ回った素材に大河ノンフイクション「ルーツ」というのがあった。

これは七代におよぶアメリカの黒人一族の実録物語である。そのルーツ（根）は、遠く西アフリカ・ガンビアの村に発し、そこからさらわれて奴隷に売られた少年クンタ・キンテから著者アレックス・ヘイリーまでの血と涙の世代記は、二百年のアメリカ史をつらぬいて展開するというしろものだ。

こういうアメリカ渡りの大河世代記が名づけた〝ルーツ〟なる題名は、今もってわれわれ身辺に一つの流行語を形づくって息づいている。一口にいえば、ルーツとは生々流転の根源回帰―言いかえれば、諸事事始めのその時代に遡って今日までのことを眺め返えすというイミにもなる。これから書くのは、いわばその〝川柳のルーツ〟である。

著者の黒人作家A・ヘイリーのものした〝ルーツ〟は、代々語りつがれたクンタ・キンテ物語だけに、至極ドラマチックな気取りのない筆致でストリーが展開し、随処に迫力あるヤマ場を構成して飽きるところがないが、これに較べて、貧しい私の〝川柳のルーツ〟は、本もののルーツの発祥の地、西アフリカ・ガンビアの村あたりに相当する個処となると滅法複雑難解で無闇やたらと七難しい用語や漢字の巣窟となる。編集者泣かせ、印刷屋泣かせもいいところである。人の好い私はそこが辛い。

そんなわけで、筆者の逃げ口上では毛頭ないが、この辺の七難しい真黒な文字面になるところはさらりとした形に書きかえて処理し至極わかりやすく、読みやすいものにしたい。そういうことでは困るという方々は、この種に関連ある文献や、参考資料もわんさとあること、そのメッカで何卒、欲求不満のうさを晴らして頂きたい。この私流の〝川柳のルーツ〟は、あくまで私のペースでことを運ぶわけ、したがって敢えて気楽に〝川柳太平記〟と名づけたユエンなり。本文スタートに当っての口上、以上の通り。

川柳のごく初期の名称は、前句附合又は前句附、もしくは単に前句とも呼んだ。

この前句附は、継歌（つづけうた）から生れ、その継歌から連歌が生じ、その連歌から俳諧、俳諧から前句附、前句附から川柳が生れたのである。

継歌というのは、南北朝時代に連歌を和歌と並ぶ文芸にもちあげた二条良基は、景行天皇四十年（一一〇）に、日本武尊が東夷征伐のみぎり、甲斐の国（山梨県）の酒折の宮で「にひばりつくばをすぎていくよかねつる」と詠まれたのをうけて火焼の老人が「かかなべてよにはここのよひにはとおかお」と答え

た。この問答歌を連歌のそもそもの発端だとしている。二人が一首を掛合いするのがいわば継歌というわけで、この問答を〝筑波問答〟とも呼ばれている。

このためか連歌の最初の撰集を菟玖波集（つくば）（一三五六）と名付け、次の撰集を新筑波集、山崎宗鑑が連歌を俳諧化した最初の集を犬筑波集（一五一四）さらに松永貞徳の批判的歌集ともいうべき新増犬筑波集（一名淀川）が出たほか、鷹筑波、猿筑波という風に、大いに〝筑波〟というのがもてはやされた。

人間の歴史にとって、笑いというものは、人間誕生の瞬間から開始された。笑いは人間の本性でもあるからだ。笑いを意識しない人間なんているはずがない。だが、なんの歴史に限らず、記録の上の立証が必要である。笑いの系譜においても例外ではない。

筑波ものが世に現われたそのはるかなる以前の古代の笑いは、神々の笑いから始った。

天の岩室に隠れた天照大神は、岩戸の前で笑いさんざめく神々の乱痴気騒ぎに、つい興味を覚えて垣間見ようと、ほんの少し岩戸の引手に隙をみせる。それを待ちかねていた手力男命が、すかさずその引戸を引きあける。

この説話のポイントは、気難しい天照大神が興味をひかれたという岩戸の前の神々の笑いがなんであったかということである。

古事記に拠ると、その八百万の神々の笑いの模様を七難しい文句で形容しているが、「胸乳をかきいで、もひもをほど」いて乳房と女陰を丸出しにしたことになっている。いわばわが国のストリップ史上、注目すべき草分け的風景である。

やおよろずの神々のこの人間的感触は、これを記録した人間そのものの感触に他なるまいが、古代前期の素朴で荒々しい継承民話は、私からいわせれば各地に遺る風土記にこそ、真実があるように思えてならない。この風土記の説話のこころこそ、人間の実性を伝え得ている点では類がない。「播磨風土記」には、こんな笑いの一幕を秘めている。

大汝命と少比古尼命とが、遠い道を重い粘土（土器用の土）の荷を担いでいく途中、荷の重い辛さと、糞をこらえていく辛さと、どちらが辛いかを言い争い、大汝命は途中で糞をしないと賭けた。数日すると大汝命は荷を置いて坐り込んだまま溜め糞をしこたました。それをみた少比古尼命も荷を投げ出し、実は私もだと思い切りやらかし、二人そろって大笑いした。その糞は今も二つの大石となって残り、その場所を波自賀村といった。波自賀とは、二人が担いだ粘土の名である。

太古の笑いにはいま一つこんなのがある。釈尊が霊鷲山で、沢山の弟子を集めて説法の最中に、釈尊は手にした蓮華の花をひねってみせた。大勢の弟子たちには、その意味がわからなかったが、ただ一人弟子の中の迦葉だけが口の中で笑いを含んだという。禅で有名なこれが「拈華微笑（ねんげみしょう）」である。この迦葉のいわくいい難い神秘的なモナリザ的微笑が何を意味したものであるかは記録にはない。だが野卑な私には、釈尊の花いじりは、人間の〝性〟を暗示したもののように想われてならない。

太古の神々の笑いにもピンからキリまである。天の岩戸のストリップから、お釈迦さまの花ひねりまで、それらの笑いはすべて単純で素朴な性に関したものが多く、ある言語学者は、ワラフとはおそらくワル（割・裂）に関係をもつ語であろうといっている。今でいうなれば、女性のあれをさしていう「ワレメちゃん」に通じていると私は想い、口辺に迦葉なみのモナリザの笑いを浮かべる次第である。

作者から―できるだけ難しい文字を避けるべく努力したが、時折りどうにもならぬ字がある。

今後共に、編集者や印刷所泣せかの作字があるかも知れないが、よろしく。

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

河村日満

坂を下りると誰かに逢える港町　高杉　鬼遊

ふっと、尾道の港町を想い出させてくれた。そして何かロマンチックの中に曳きずり込まれた感じで、暫らくの間は空虚。そして現実にもどって二読、三読。うまいものだ。

明治まだ木綿の折目から流れ　水粉　千翁

明治の一徹は表看板。その明治を「木綿の折目」から引き出すあたり、さすが「川柳道場」の大師範ではある。

敵前上陸　そんな構えでいる桂馬　不二田一三夫

将棋の往き方ぐらいしか知らない私だが、桂馬の横っ飛びだけは珍らしく感じている。じっとこの「桂馬」という二字を見ているだけで、上五の「敵前上陸」と結びついてくるから不思議だ。将棋の駒からもこんな佳句が生まれる。勉強しなくっちゃあー。

どの骨もみな折れそうに思う歳　若柳　潮花

想は新しいものではない。しかし私もその歳になっているのだから、身につまされるのだろう。それこそ「どの骨も」にである。

友だちはいい人ばかりさくら咲く　小浜　牧人

ありゃこんな句を牧人さんが、と思った私の方が認識不足？。川柳するものの倖せぶりが句一面に溢れ出ていて、こっちの心まで温めてくれる。こんな心境の句ばかりを作句したいものだ。（編集部註—牧人氏は五月十日夜急逝）

純粋に生きたとおもう我が戦記　香川　酔々

私もそうだ。と云いきれるところに、この句を推す資格があるのだとおもう。いろいろな噂のあった軍隊だけに。

ほほえむと神に近づく知恵おくれ　中村ゆきを

この作者は知恵おくれの子をよく観ているようだ。上五と中七に私は胸を締めつけられるような痛みを覚えながらこの句を読んだ。この子等の倖せを祈りつつ。

昭和一ケタ飢餓感が離れない　関　美子

不況だ、不景気だと云っても、まだまだ現在の世は物資が有り余っている。そんな中で昭和一ケタの目は飢えに餓えたあの日を、忘れてはいけないのだ。いつの日にか又。という危惧におびえて。

春一番マンネリズムの頬をうつ　高橋　夕花

今年の春一番は、日本列島の頬をうった。私も打たれたその一人で、特にこの感が強い。「マンネリズムの頬」が利いた。

よれよれのコートに父の詩がある　小島　蘭幸

くたびれきったコートの中に、父の言葉があり、父の過去がある。一家の生活を支えてきたんだもの。上五がよく利いて句をひき締めた。

夕星のしたたり青し山の峰　板尾　岳人

金剛山にいのちを賭けた男の、瞳にしか見えぬしたたりかも知れない。しかし「そう云われればそうかも知れない」と思わせるものがこの句にはある。「青し」が何ものかを私に感じさせているのだ。

四十路にも春はときめくものがある　森井　菁居

四十路でなくて私でも、と云いたい春の訪ずれに誰が浮かれぬものがある。「春や春」まだまだ若いこの作者に「ものがある」などと老け込ませてはなるまい。中七から下五にかけてのリズム感が好きだ。

合格の暗号もよしサクラサク　太田　亀甲

入試関係に遠ざかっているので、この句に教えられたのだが、これでみると不合格は、「サクラチル」か。下五の「サクラサク」に強くひかれるものがある。この外十句採りあげたがスペースがない。

入江　勇

誹風柳多留廿五篇研究

―（十九丁）―

紀内恒久・室山三柳・青木迷朗
入江　勇・西原　亮・清　博美
鈴木　黄・八木敬一・岡田　甫

335　**咲屋姫俗名お藤さまといゝ**

紀内＝「咲屋姫」は「木花咲耶姫」のこと。富士山頂の浅間神社にこれが祭られているところから富士山そのものに見立られる。本句も富士山に見立て「俗名お藤さま」というだけの句。

青木＝賛。

咲耶姫三国一の裾ッ張
女体ゆへ雪のはたへのお山なり　（二三・32）

室山＝同。「俗名」がおもしろい。

岡田＝同。

336　**目の有とない紫衣の出る大法事**

紀内＝目のある紫衣は僧正、目のない紫衣は検校。

室山＝同。

蟬丸に似た人をよぶ大法事　（三四・30）

と、導師は僧正、供養の琵琶（法師）は検校。

入江＝同。

琵琶の音にお経のまぜる大法事　（六一・8）

八木＝僧の紫はわかるのですが、検校は何のために「大法事」に出るのかよく分らなかったのですが、室山氏のおっしゃるように、供養のために琵琶をひいてもらう、ということなのでしょうか。

岡田＝琵琶を弾かせたのでしょう。

337　**膝や手をはたいて翁かへるなり**

紀内＝芭焦翁「いざさらば雪見にころぶ所まで」。「ころぶ所まで」だから、転んで起き上って膝や手をはたいて帰るというだけの句。

おきなとハ雪に転ふと詠だ人　（一二一丙・1）

室山＝同。

いざ行む雪見にころぶ所まで
いざさらば雪見にころぶ所迄
いざ出むゆきみにころぶ所まで

のうち、「いざさらば……」が、もっとも普及。

岡田＝同。

338 **むさし野で虫をあきなふ繁昌さ**

紀内＝「武蔵野」は関東平野のうち、東京都あたりをいう。その昔は、まさに一面の野原であったのが、江戸という大都市が出来、そのにぎわいは昔の武蔵野からは想像も出来ない程になったという。江戸の繁昌礼讃の句。それを、「虫を売る」という語で表現したもの。

武蔵野へ虫うりの来るはんじょうさ　（四七・6）

西原＝賛。実に近代的な内容の句である。

室山＝同。虫の多かった武蔵野で、「虫をあきな」わねばならぬほど、人口が増加した「繁昌さ」が、句の主眼であろう。

八木＝江戸で虫が全くとれなくなったから虫売が来るというのではなく、子供がちょっと足をのばせば虫はいたと思う。しかし虫売りが来たことは事実です。虫とり、などという苦労をせず、鳴く虫を虫売りから買って鑑賞する。生活レベルの向上を詠んでいると解釈できまいか。公害問題の切実化する以前の江戸ですから。

岡田＝賛。

339 **不沙汰の言訳もさせた名句也**

紀内＝其角雨乞の句。「ゆふだちや田をみめぐりの神ならば」

傘かりに沙汰のかぎりの人が来ル　（初・35）

四五年の口をたたいて傘をかり　（安二・松1）

青木＝賛。

名句だと誉め傘にこまる也　（安六・松2）

室山＝礎稿例句で句解すみ。

岡田＝同。

340 **旅日記八日目に付く杜若**

紀内＝業平が「かきつばた」の折句をしたといわれる三河国八橋。「大辞典」「時代川柳大観」に引用、「江戸から八日の行程」と注があるが、それだけではなかろう。「江戸から八日」というだけでなく八橋の「八」のきかせと思う。

橋と草十三に折る名所也　（四八・5）

青木賛。八日…八橋にかかる。

岡田＝同。

341 **尊とさハ無言でかわず経を聞**

紀内＝小石川伝通院「無声蛙」。開山了誉上人が勧学の邪魔になると蛙の声を封じたという。何しろ凡人には出来ぬ業である。

書を学ぶ邪魔と螢ハだまってる　（一四一・8）

青木＝賛。

上人は無理だと蛙耳こすり　（一五二・24）

尊さは蛙無言の行をする　（四二・18）

岡田＝同。

342 **追善に柳の枝を手向なり**

紀内＝梅柳山木母寺にある梅若塚。

梅若丸は吉田少将惟房の一子、陸奥の信夫藤太という者に欺かれて東へ下り、隅田川に至って病にかかり、十二才にして死んだという。「江戸名所図会」には、

この時（梅若丸死亡）出羽国羽黒の山に下総坊忠円阿闍梨とて貴き聖ありけるが、適ここに会し士人と供と謀りて児の亡骸を一堆の塚に築き、柳一株を植えて印とす

とある。

八木―余談ながら、木母寺は梅若の梅という字を分解したのが始まりではなかろうか。字がちょっと違うが。

岡田＝木母寺は八木氏の説のように、梅の字を二分して付けたものです。

路郎賞
川柳塔賞
候補作品中間発表

自 53年1月号
至 53年4月号

路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

人間が棲めば灯りの洩れる窓　香川　酔々
ものを書く姿勢に骨は安んずる　橘高　薫風
逆らわず流れてゆけば海がある　津田　与史
月も光ってる知恵のない貌で　岩田　美代
樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊
藁いっぽん火になることも知っている　松原　寿子
開店の定連になりそな顔はなく　都倉　求芽
苦労などおまへんやろと馬鹿にされ　村上　春巳
肩を揉む妻に脳天覗かれる　宮川　珠笑
母馬の歩巾になれた柵の道　八木　千代
この重さ取らねばよかった鬼の首　安藤寿美子
神様が黙っているのをよいことに　中川晃男

若本多久志

雑魚釣って帰る夕焼美しい　羽原　静歩
着飾らぬ女に母の顔ダブル　那須　鎮彦
四角いサジその律義さをうとまれる　川口　弘生
逆らわず流れてゆけば海がある　津田　与史
千の顔千の腳の初詣　玉置　重人
のし袋思い返して一つ抜き　中川　晃男
やめられぬ酒だと酒が知っている　恒松町紅
ねぎ二本ぬいて夫婦の夕支度　鈴木かつ子
人の世の峠は見えて雲流る　西　いわを
百薬の長にして飲むむずかしさ　工藤　甲吉
道遠く追い抜く雲をとがめまい　水粉　千翁
ほとばりを抱くとき部屋は闇にする　宮西　弥生

西尾栞

白昼に聞く尺八のニヒリズム　谷垣　史好
幸福のひとつ隣りも似た暮し　若宮　武雄
野の仏飛鳥はやはり歩くとこ　玉置　重人
砂時計もてあそびつつ時は去る　高橋千万子
チャンスです今良心が死んでいる　岩田美代

樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊
開店の定連になりそな顔はなく　都倉　求芽
わたしより不幸な人がよく笑い　越智　一水
攻撃は致しませんとバラのとげ　小谷　仙山
年賀状この人々に支えられ　野呂　右近
母馬の歩巾になれた柵の道　八木　千代
春闘も駅の時計はたしかなり　嘉数千代香
春愁がその冗談を許さない　西山　幸
本妻の意地です何もかも磨く　両川　洋々
元勲の孫さすが記憶とり戻し　河原みのる

橘高薫風

元日にお経が読める歳となり　田垣　方大
バンザイの後姿に隙がある　竹中　肖二
大根をおろせばボタン雪に似て　大原　葉香
秋風も一緒にくれた赤い羽根　小川佐知子
てっぺんの柿へ立話がつづき　水粉　千翁
昂ぶりが静まるまでの独り言　垂井千寿子
立読みの一人が不意に笑い出す　金井　文秋
本妻の意地です何もかも磨く　両川　洋々
挨拶状左遷と思えぬいい文句　小林由多香

起工式汚職は祓い給われず　原田　明春
鏡にはうつらぬ罪を持つ女　野呂　右近

川村好郎

喝采もやがては消える闇である　香川　酔々
横糸を少しゆるめて妥協する　西山　幸
ピリオドがあるから思い出美しい　柴田恵美子
着飾らぬ女に母の顔ダブル　那須　鎮彦
樟脳よ君と僕とは痩せるべし　高杉　鬼遊
保釈されたように出た来た鯨尺　本多　柳志
美しく老いたし萩の庭に佇つ　黒田　真砂
ほこり出ぬ男五十の頼りなし　高橋千万子
もう一晩ぐらいと母は見送らず　岩本雀踊子
菜を漬ける女の業と楽しさと　岩田　美代
虹かかる胸は女の業となる　和田維久子
明日の灯へ鳴らしてあるく母の鈴　八木千代

菊沢　小松園選

横糸を少しゆるめて妥協する　西山　幸
いとしさはふれずも落ちる萩の花　天正千梢
離職しても朝の生王子は啜る　小浜　牧人
みなさまの銀行造花に迎えられ　高杉　鬼遊
びくびくするな手がある足がある　津田与史
チャンスです今良心が死んでいる　岩田美代
人柄の丸味へ切っ先折れてくる　野村太茂津
定年退職麦藁帽がよう似合う　嘉数千代香
古机拭けば思い出喋り出し　八木　千代
人柄が楷書のように孤独です　田垣　方大

川柳塔賞候補作品

戸田古方

捨てられる瓶の誇りか口を閉じ　福本　英子
夕立の間も噴水は立ち続け　池田香珠夫
デッサンのまま成長して女　古谷　節夫
楽園へ漕げるボロ舟組んでいる　柴田恵美子
まな板の魚が睨む生き造り　小山　悠泉
すばらしい情事なら合鍵を渡してもよい　すがかつこ
他人にゆだねた独楽はよく回る　杉浦婦美子
幸せな暮しおろかな愚痴を言う　田中善四郎
倖せな顔の皺なら気にすまい　北野　久子
白い足そこから春が顔を出し　西久保苔石

大坂形水

子を叱る声がいつもの朝にする　牛尾　緑楼
デートする子が晩酌を注いでゆき　角　耕草
忘れ物取りに戻れば揉めており　田中紀美代
雑踏にさみしがり屋の靴がいる　納　史葉
絵馬堂に残した願は風が消す　河合　茂雄
仕事場の埃は仕事場で払い　船越　汽水
白杖の先一寸を見逃がさず　池田　半仙
私だけ入る小さな円を描く　川上　富子
ピリオッド合掌をして医師は去り　三上春雄
五十階ビルの非常をどう逃げる　矢野　佳雲

小浜牧人

私だけ入る小さな円を描く　川上　富子
ひょっとこの本当は泣き顔かも知れず　宮尾みのり
ひたすらに生きてく水の旨さかな　大林曲ん手
仕事場の埃は仕事場で払い　船越　汽水
逢えるような予感でひらくコンパクト　北野　久子
捨てぜりふ吐くと私は負けになる　松田宇宙太
どこをどう転んでいたか丸い石　飯塚　虎秋
約束を果すと眠り深くなる　納　史葉
逢うて別れて風に鳴るものまでいとし　小谷　葉子
あなたからあんたになって子が二人　岩田　三和
肩書きに人間性が縛られる　池田　半仙

▼最終回の中間発表は九月号になります。そして十月号で晴れの二賞が決定します。

五湖抄

正本水客選

飲む人も飲めない人も花の駅
人間の暖さ冷たさ喪があける
娘を一人欲しいと思う桃の花
かたくなに生きる男の形容詞
おざなりの言葉に軽い飢をもつ
馬車にならぬ南京釜ゆでに

八尾市　納　史葉

まだしこりあって枕を裏返す
見つめれば鏡は情けをくれそうで
はみ出さぬ程度に会話の中に居る
反省はしても白には戻らない
女三人例え話を飛躍さす
はずむ日の髪はどちらへもなびく

三重県　川上富子

哄笑へ聾の心によぎるもの
ドラマ追う無音に慣れてきた月日

松原市　北野久子

恍惚の髪すく背なに春うらら
口説かれた隙を鏡に問うてみる
音絶えて女盛りを咲き切れず

今治市　矢野佳雲

白魚の骨細ぼそとすきとおり
分校の野球打ったら海へ落ち
銀鱗が光れば雑魚も美しい
虫目鏡我が生きざまに当ててみよ
塾嫌い草の匂いを持ち帰り

今治月　渡辺南奉

直線をまっすぐに歩くのに疲れ
淋しさを雲に預けてしばし和す
貧しさをかくす背伸びをあわれとも
川ある日逆流したい世のすさび
男だから男が解る握手する

和歌山市　浦野和子

絵心を拾うて小さな散歩道

切り返えす一言選っている無口
ギリギリにふくらんだ恋割れました
生来のやじ馬　脇道ばかり撰り
杉玉に誘われ買うたにごり酒

西宮市　杉浦　婦美子

自画像へうんと美人に描いてやる
旅誘ういい事ばかり盛り合わせ
子が巣立ち夢のかたちも変ってき
京四景どの写し絵にも亡母の在り
風邪引きの部屋で匂いを見失う

名古屋市　大林　曲ん手

見どころがあって表紙の裏に書く
点滴のような意見は母がする
置くとこへ置けばハニワも木偶でなし
人の輪に丸くなる人ならぬ人
見ていれば雲は私を通り過ぎ

鳥取県　加藤　茶人

原点に戻るサイコロなら振れる
苦を楽に変えて働き蜂で居る
ヤジロベーどう自慢しても似た夫婦
養老院へ来てまで自慢の子がひとり

大和高田市　岸本　豊平次

不仕合せ同士で本当に笑い合い
親の眼を離れた単車で飛んで行く
口答えした娘が嫁に行く不安

そこのけそこのけ筍天に伸び

島根県　岩田　三和

通達にだまされまいと本を読む
勝名のり受けるときにはあどけない
友達をさがしに森へ行ってみる
振りだしにもどれる人に付いてゆく

兵庫県　辻　文平

柿少し吊して廃居でない証拠
覗く眼が前の鏡の中にある
枕頭の時計遅れたままで春
湯豆腐の湯気ごし愚痴を聞かされる

岡山市　船越　汽水

青春の本の値段を懐しむ
先生も生徒もアルバイトがお好き
ぬるま湯のなかで出世にだけ嫉妬
逆立ちをしても適わぬから欠伸

鳥取市　中森　葉士人

倖せは鯛の寸法では決めぬ
スタートのむちを嫌っている一頭
温室を出てから耐えることを知る
繁栄の一つの車輪を妻廻す

大阪市　岩井　公平

光芒は吹雪の闇を切って見せ
老醜はさらしたくなし欲は欲

訃報相次ぐ

目を閉じて生者必滅の秒を聴く
死ぬなんて思わぬことにしてお酒

大阪市　白石　潔

赤のれん話題が変りもう一本
晩酌とテレビで無事な日日である
気楽さがやっぱり後家にさせておく
そこまでは持つ気半年定期買う

愛媛県　宮尾　みのり

淋しさの中へ電話の有難さ
生き物のような時計と寝むれぬ夜
月蝕を飽かず世俗に遠くいる
歳時記へ今年も少し書き加え

倉敷市　藤原　桜山

逆風へ後には引けぬ衿を立て
こぼされて水は大地に還るだけ
根廻しが利いたかシャンシャンシャンで済み
正論を少うし曲げて波を避け

松江市　梅本　登美也

人は皆手品のように家建てる
バス停でひとり拾った赤字線
ミステリー只キューピーの目がまるい
景気ちと上向き大工唄が出る

岡山市　原田　凡太郎

今日もまた地図にない坂歩かされ
タレントの離婚待ってる週刊誌

溜息を妻に用事と間違われ
瞼だけ福田総理のようになり

堺市　玉井　邦晴

したたかに生きて女に影がない
尻込みの女を遠慮だと思い
おうどんが好きと言う子で生さぬ仲
おっさんと呼ばれて若い用務員

熊本市　有働　芳仙

祝い酒しらける顔が這入って来
愛してる後ろ姿は直ぐ分り
恋などを知らない頃をなつかしみ
もう君も停年だよという仕草

鳥取市　岸本　無人

延びちぢみする物指しで儲けてる
二本目の煙草でやっと腰を上げ
似ていないところで何んとか鯛と云い
花好きの女へ贈る花言葉

大阪市　堀口　欣一

人の顔のそれぞれ哀し春の旅
美しい姉に連れられ身障児
酒もまたいささかはよし軽い恋
湖西線春を迎える通り雨

寝屋川市　小林　鯛牙子

充ちたりて大きな夕陽がおりてゆく
たんぽぽを蝶の離れぬ風日和

沈丁が匂えば洋酒が欲しくなる
後悔の痛みが胃袋おりてゆく

海南市　牛尾緑楼

肩書きがあって白旗出せぬ人
ぶつけたい言葉にそっと封をする
ひとすじの涙が礼を言っている
貝の実が片方無いと子に泣かれ

羽島市　伊藤静枝

ボランティヤ身近な事で輪をひろげ
娘の躾孫のしつけに老い忙し
就職の子の遠くいて便りなく
花便り日程すでにつまりけり

寝屋川市　稲葉好子

雑草に生活の色を見る思い
人気スター美女対談に腰をあげ
二度三度繰り返して言う年になり
足音が似た人の顔見たくなる

出雲市　園山多賀子

ひたむきに生きる姿勢へ背を伸ばす
雨の日のゆとりは妻にペン持たせ
みの虫の小枝信じてぶら下り

町田市　竹内紫錆

副会長閉会の辞が専門で
校庭の外まで気合い拡声器
バス停の円板四季を背景に

どの子にも母バーゲンを選び分け
家計簿をつければゼニが逃げそうで
交差点車に睨まれながら駈け

旭川市　朝倉大柏

白鳥が足突っぱって着水す
塾の子が帰るひととき賑わえる
嫁に手を引かれて参るポックリ寺

岸和田市　池田香珠夫

春だなと思う散歩にあるリズム
ぐうたらな男にきつい批評され
よくよくのこと口下手に握手され

尾鷲市　渡辺伊津志

入院の日のそのまんま亡母の部屋
亡母の部屋柱時計は遅れ気味
まだそこにいるよう亡母の鏡掛け

豊中市　満仲きく子

北国の故郷へ送る花便り
冬枯れの庭をいろどる黄水仙
老夫婦指輪もペアで睦まじい

岸和田市　清野こう

とぼとぼと坂を下って老いた鬼
歯の抜けた鬼は仏の顔になる
何時の間に鬼は私の座を奪い

出雲市　石倉芙佐子

高槻市　大垣たもつ

幼稚園もうお昼かと迎えられ
後添いはたんとあろうと姦しい
先生が休めといった風邪をひき

岡山市　花田たけ志

あの世にも亡夫が居ない日が欲しい
占うてみる気になった夜が来る
顔色に出てそれからはおしになり

和歌山市　坂口公子

纏う影日に真向えば従いて来る
むなしさが大きな声で笑わせる
さくら前線に逆らった旅でよし

橋本市　岩倉天彦

葉桜が好きと花見に行かず寝る
酔うこともよし鎧をぬいだ肩を組み
いきいきとパパ日曜の台所

唐津市　三浦ひろ坊

春浅し歯科の待ち合い足が冷え
惜しまれて去ろう夕陽の坂下りる
インフレになれと日銀ドルを買い

岡山県　池田半仙

ストレスの溜ったとこへ顔を出し
旅行中豊かな顔でショッピング
ジョニ黒を開けたところへ行き合わせ

東広島市　石井さわ子

ペン置いて見上げる空に雲走る
磨かれたウィンドに女の独り言
母のとぐ米母らしいリズムあり

唐津市　岩崎実

朝の駅まだ明けやらぬ顔もあり
乗り降りの客に一枝の桃の花
白い波岸辺に軽くごあいさつ

和歌山年　福本英子

点滴の瞳で通じ合う友がいる
トンネルを抜けて生命の有難さ
れんげ草減反行政など知らぬ

大阪市　新川貞祐

寺までがお城まがいの隅櫓
昼食は出石五枚重ねの蕎麦の皿
風と波防ぐ石垣屋根を越し

宇部市　樋村天流

だまされる額が善人大き過ぎ
あの孫この孫旅の老妻人気者
古稀善哉女体は無用陶枕

橿原市　西本保夫

話題すぐ変えてくよくよせぬ定年
電話の声みんな知ってるもう定年
マイホーム緑に包まれもう定年

鳥取市　北野天人

制帽を脱げば童顔の目が笑い
全快を信じる夫の手足拭く

ジーパンのお尻に少し娘の色気　大阪市　欄　蘭

めでたさへ寂しさ残して娘は嫁ぎ
四円ずつ捨てるが如き玉弾く
同郷のよしみで世話をやきに来る　羽曳野市　麻野幽玄

神の住む森も一色雪景色
煩悩のしょせんは去らず雲を追う
旧道の賑わい桜咲くあいだ　呉市　山根喜代美

六法を無視した愛のたじろがず
ストレスへ追打ちかける向い風
出逢いからあなたのカラーに染まりかけ　岡山県　二宗吟平

どこからか鶯鳴いた墓掃除
思うこと無い日は肩がこって来る
枯れそうになってやれ水やれ日なた　東予市　小山悠泉

円高に日本列島ゆすられる
花道のない人生の曲り角
妻だけは信じてくれる旅のうそ　唐津市　桧垣岩光

春がもう動いて木々の芽が笑う
子供っていいな若葉の道を駆け
絶景を十円玉で引き寄せる　竹原市　古谷節夫

栄転へ予想もつかぬ顔があり
雑草の根性四季の花咲かせ
但し書き生きて本文抹消され　島根県　松本文子

動き出す春に逆う訳でなし
ライバルは挨拶素直に受けてくれ
もう昨日のわたしではない沈丁花　岡山市　清水金太郎

血縁に見放されてから目が覚める
我が子には触れず他人の子を責める
貯まらない人ほど金を軽く見る　長崎県　岩崎和子

旅疲れ気ままにさせる妻が待ち
デザインのここが主人のお気に召し
すぐ効いた薬で長い副作用　新潟県　高野不二

大卒を叱って学歴ふりかえる
収入の比較はしない世帯主
検針の結果初手から断る気　豊中市　田中善四郎

割り込んで来るを許しておでん酒
子と走る朝の水仙すがすがし
ぜいたくの精一ぱいが大ジョッキ　岡山市　井上柳五郎

ちさい善老の弱気がノックされ
転勤の挨拶信じぬ四月馬鹿
値引きなどせず外人のサンキュウ

札幌市　北村深星

いわし雲捨てた故郷が目に映る
凡人と言われながらに父好かれ
争いをさけて冷たい姑の眼

前月分

停年の父へ言葉が見あたらず
派手好きで母はさらりと美しい

羽咋市　三宅ろ亭

孫入学着飾るママにある貫録
仕方なしについてるようなデモ通る
よもぎもう摘む人もなく村荒れる

寝屋川市　福富隆子

心得て酒量へしてる哀れみる
一寸すね逆らってみる生きて居る
やっこらさ立ったついでにする用事

大阪市　溝渕美紀子

カーテンの隙間の月に語りかけ
遊ぶ種次から次へと子は飽きず
旅一人背中丸めて夜行船

泉佐野市　大工静子

手招きの春に袷を縫い後れ
鍬肩に詩吟にあわせてペタル踏む

観心寺大楠公の歌忘れてず

岡山県　岩道博友

質問の答は零も覚悟する
カラオケで歌わせ時間で引張る気
雨の日の歩調は無粋な通り抜け

松江市　黒目大鳥

八十八夜新茶日本の風物詩
あちこちの鐘の余韻の花まつり
富士を背にいちごハウスは原色化

兵庫分　高橋近江

早く種蒔きなとコブシ咲き揃い
直ぐそばに有るのも見えぬ専門店
デスマスク極楽行きとは思われず

大阪市　平井露芳

流れ星急に住居を変えた奴
古傷を時効にさせぬレントゲン
なんちゃっておじさん不況へ節をつけ

尼崎市　中谷利美

兵古帯の位置で阿呆に見せる役
目標は高からず又低からず
ありがとう妻へ素直に言える齢

富田林市　中村優

風雪に傷一つない飾り雛
指先きで押してやりたい娘のえくぼ
特技はと聞かれハーモニカ鼻で吹く

反対反対もお手盛り増俸に異議はない　吹田市　藤原世史春
不況下のデモも足並重く見え
ストをすることに決めてるストであり　兵庫県　野々口ゆう也
年寄りのくせにとわたしもそう思う
あくびしたとこへ退屈やって来る　唐津市　桑原掬治
忙しい時に花見も割り込んで
お茶の席わが子と思えぬつつましさ　今治市　園部正則
庭師から見れば石にもある情緒
椅子とりのような世相で息抜けず　名古屋市　越村枯梢
水平線日の出だ船首立て直す
水槽よ金魚の口は空っぽで　岡山市　砂田静佳
口づけで吸ってやりたい孫の咳
裸木の平和会議緑着る　唐津市　田口虹汀
美味そうな水に音有り錦鯉
春を待つ枝にみくじの古うして　大阪市　向井久生
春寒に葉先ふるわせ松ねむる
お花見に行こう行こうと妻は云う

晴着きた娘の姿へ遠い春　倉吉市　田民碧水
寒稽古暖冬異変で気が抜ける
目出度目出度の拙な完結　伊予市　大島八十八
あすから遊ぶ短大にパス
家の色に染まってこれから織る苦労　出雲市　板垣夢酔
包容力あるけどお前の分はない
掛け樋の水の素直に瞳をひかれ　岡山市　串田句眛地
お早ようは人違いでもてれずすみ　尼崎市　中塚喜甲
疑心暗鬼妻にへそくりなどはない
利用価値なく善人はほっとかれ　唐津市　菅たか子
病気とも云えぬ保険屋の友が居て
あれほどに望んだひまを持て余し　大阪市　向井しづ子
一と晩をすごしてしまえば忘れます
娘には贈らずじまいのよい悟り　諫早市　江副二牛
長崎空港海に浮べるアイデアー
善人の恐さ他人を疑わず　青森県　波ただお

人情の味お隣りのおはぎ出し
窓開けて朝の太陽にオハヨウさん
大阪市　小谷清女

春の風噂を乗せて立ち話
音のする方へ目かくし向き直り
唐津市　山下勝一

強がりを云うて損するときもあり
ホトトギスもう待てませぬこの不況
大阪市　中辻千子

家庭持ち母の気苦労分りかけ
ふり返る亡父によく似た人が行く
八戸市　島田昭治

人間の弱み褒められ良く動く
人使い太閤さんの真似をする
兵庫県　川井白峯

しとしとと降る春雨にペンをとる
就職の先ず第一歩靴磨く
山口県　高崎雀声

入学の夢が覚めてる卒業日
失敗を若さとなぐさめられた頃
大阪市　野田君枝

走りたくない日もあろう競走馬
甲子園だけが不況ふっ飛ばし
唐津市　田中紫浪

あれこれの苦労も知らず杉育つ
海苔竹のまだ立ちならぶ花見どき
唐津市　筒井朴竜

潮騒が石仏の鼻を削ぐ岬
頬ゆがむ岬石仏の供華も枯れ
宇部市　樋村天流

旅の妻くどくメモ置く仏の灯
古稀の十指まだみな動く幸せさ
倉敷市　中津伊勢吉

障子戸の部屋が明治を落ちつかせ
引越しのたびにてこずる猫の処置

▼句の上へ○や番号をつけないこと、用紙は本社柳筥か、本誌と同寸法の用紙を使ってください。雅号は句の右側に書くことも守ってください。（編集部）

★

妻と来て一番安い昼にする
片言で孫がとりつぐ電話口
ただし書でやっと申請許可される
会閉じてからは幹部の秘密会
大洲市　**米沢暁明**

月給をいきなり聞いた娘の見合い
人間の限度に非常口がある
敗者復活駄目なら押してみる若さ
足踏みは老いの我慢の中にある
円高の施策泣き顔かも知れず
岐阜市　**市川鱗魚**

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

山根白星

祭壇の値踏み会葬して帰り　中塚喜甲

冠婚葬祭に臨み、心から喜び、しんそこ悲しむ者が幾人いるであろうか。豪華な祭壇には嫉妬し、貧弱なそれには優越感を持つ、救い難い人間の本音。これは作者の、エゴイズムの曝露、真実の証言であり、懺悔の作品なのでもあろう。

＜喪章とりながらはんぱな午後となる＞たましいの売贖の句なのでもあろう。

胴あげの最後に受けてくれる人　岩田三和

喝采と歓喜の狂宴の終りに、ずしりと重く受け止めて呉れた人こそ、このヒーローの寂寥と苦渋の過去に、ともに涙して呉れたかけがえのない人なのである。

＜胴あげのこの人となら死のうとも＞

口下手な女が抱いている寓話　浦野和子

本当にしては言葉が多すぎる　岸本木魚

対蹠的な作品である。

雄弁は銀、沈黙は金ともいうけれど、この訥弁の奥底には、眦を決した女人の志が昂りをみせている。えてして立て板に水のバナナの叩き売りの饒舌には真実がハレーションを起す。

＜テニオハが狂い怒りの漁夫の膝＞

紅梅の蕾のほかは暮れていて　小林鯛牙子

上々の写生吟。さりげない表現で夕闇にたゆとう紅梅の蒔絵のような色上げの美しさは絶妙である。俳句的発想の佳吟である。サヨナラで始まる恋ならしてみよう。

咲き誇る牡丹に敗者の声がある　小谷葉子

なかなかの達吟家である。愛を愛として確かめた時に、とかく終焉の吐息を洩らしがちなものだから、そのターミナルから出発する恋なら——と作者は云うのであろう。

妖艶、豊麗を誇示するかに見える牡丹は、実は、か弱い傷つき易い花なのだ。

＜一つだけ胴ぶるいして牡丹落つ＞

石投げてから考えてみる正義　藤原桜山

この断定的な体言止めが、却って、おぞましい心の風景を覗かせる。残念ながらこの人一筋縄ではゆかぬ現世に、出世する気使いは全然ない。なにしろ正義の前科があるのだから。

＜出る杭は打たれるだけの正義感＞

妥協した敗北感に夜の振子　渡辺南奉

理解の錆に腐蝕されて、人生に悪いオチをつけることになった妥協は、生きる為の本能的な逃避で、言い知れぬ敗北感を伴う。放電を終った蓄電池のような脱け殻の孤影は、夜の振子と、情死を遂げることになるのだ。

父として言わねばならぬ嘘だろう　川上富子

どんな嘘であろう。来し方の実像の虚飾か—。行く末の虚勢—か。不条理な世の中に打ちのめされて、もぬけの殻の人生を知り尽くした父親の、真実の嘘なのであろう。

＜子を叱るほど働きのあるでなし・山雨楼＞

猫飛んでどさどさ落ちる屋根の雪

湯の町はそぞろ歩けばすぐ尽きる　池田香珠夫

どさどさの擬音効果が、ビビッドに一瞬を無限の時間と同一にさせた。

湯の町の、ありていを詠んでうなずける。誰しも経験のあるところ、頭だけでは、でっちあげられぬ実感句であろう。

客曰く美味しいわこの辺の空気　満中きく子

衒いなく詠んで、この家のたたずまいと女客の情景が、ホーフツとして浮ぶ。夏のはしりの釣忍ぶが、軒に青い。

光芒のとどく限りを舞う吹雪　岩井公平

前書に、灯台所見とある。前書に倚って鑑賞すれば俄然、陸離たる光彩を放つ。けれども、前書なくんば、やや歩行難の憾みあり。

愛染帖

橘高薫風選

兵児帯と繻袍にせめて隙を見せ　倉敷市　水粉　千翁
白い歯のこぼれた妻へ靴を脱ぎ
妻と子と孫に見飽かず見つめられ　青森市　工藤　甲吉
淡雪とまがうリンゴの花ふぶき
日めくりを逆にめくればなつかしや　米子市　八木　千代
メサイアのレコード仏間でひとりきく
花の季のお墓詣りは度々に　大阪市　小出　智子
亡父の心に追いつくまでの石を積む
喪の部屋で悔いがおおきくなるばかり　倉吉市　奥谷　弘朗
日々好日心残りのないように
一徹な虫で脱皮に手間が要り　伊丹市　樫谷　寿馬
暖い土を好まぬ父の骨
より透明な瞳でカットグラスを賞でる　東京都　山根　白星

風評を意にも介さぬ女弟子
マヒの子を眺めやる子へよそごとを　鳥取市　河村　日満
栄えてる頃の社にある父の過去
来い来いが言える故郷の蟹と梨　和歌山市　桑原　道夫
寝転ぶと眉間に迫る「もの」の角
はてなと玄関でふと見上げる空　八尾市　大路　美幸
火葬場の煙見ている他人達
白紙ほど許す心になれませぬ　大阪市　江城　修史
命とは何かと思う流れ星
エリートの冷たさ老いて尚更に　和歌山市　西山　幸
透明な五月の中のシラノ達
オフェリアの偽善を見抜く白い蝶　神戸市　来住タカ子
桜ちらほら逢いたい人へ便り書く
人恋しかめばすっぱい梨の芯　神戸市　宇佐美和子
やさしいあなた淋しいあなた春の旅
紫を抱いておんなになれますか　島根県　飯塚　虎秋
ドヤ街に一味ちがう専門書
栄転の握手冷たい手にも触れ　八尾市　高橋　夕花
松葉杖母のこころを踏んでゆく
母と子の心通わす夕ざくら　枚方市　宮川　珠笑
美しい夕焼け結論出た会議

忌の家の道順通り蝶がとぶ　東大阪市　竹中　綾女
肖像画に話しかけつつ日を送る
何言っても返事は聞けぬ肖像画　鳥取市　中森葉士人
署名する一字一画怒り肩
片腕になる約束の手はポケツ　今治市　矢野　佳雲
自画像へ自然な色が付けられぬ
桟橋へ別れ話のつかぬまま　倉敷市　藤原　桜山
色即是空法話の主が若すぎる　富田林市　岩田　美代
四月一日男と女の真面目な話　京都市　都倉　求芽
花鋏花に血がないと思うてか　今治市　月原　宵明
年金の額ペン胼胝が自嘲する　岡山県　直原七面山
戦争を知らぬ男が買う化粧　松江市　梅本登美也
階段がきしむ記憶がよみがえる　唐津市　新岡回天子
相愛の仲でもないに五十年　大阪市　那須　鎮彦
ブランコが陽気にゆれる花盛り　今治市　越智　一水
花吹雪愚痴は言うなと散ってくる　東子市　小山　悠泉
まだ燃えるものあり子には妥協せず　大阪市　新川　貞祐

金丸座突如おはやし鳴りはじめ（琴平）　羽曳野市　麻野　幽玄
繰り返す愚かを見てるシャンデリア　和歌山市　津田　与史
新芽ふく人間にない新芽ふく　岡山市　砂田　静佳
銀世界の浄土の中に亡夫みえず　和歌山市　若宮　武雄
紅白の荷を見のがさず花吹雪　岡山県　出原　敬一
闘病の便りに流転の一句あり　京都市　松川　杜的
飄々と来て飄々と友去りぬ　兵庫県　辻　文平
雪しぐれ枯芦同士支え合う　兵庫県　遠山　可住
牛乳瓶の底の残りが目について　和歌山市　松原　寿子
合掌の指間に虹の橋がある　今治市　園部　正則
日曜の予定を捨てるイエスマン　岡山市　川端　柳子
落花舞うしあわせ色を選びましょう　唐津市　桧垣　岩光
花の冷え番茶で語る老夫婦　唐津市　田口　虹汀
ふんわりとせまる感じの春にふれ　鳥取県　清水　一保
寿命の抵抗歯医者混み　守口市　羽原　静歩
矢車よ浄土の風を孕むべし　香川県　三井　酔夢
さくらさくら大正琴のなつかしさ　寝屋川市　柴田恵美子
雑居ビルフレッシュマンの礼を受け　島根県　堀江　正朗
呆けないで稼げと孫の産声が　島根県　堀江　芳子
三月のみかんは祖母に似て甘き　堺市　高橋千万子
四捨五入そんな所に居る人事　平用市　久家代仕男
閑職に馴らされ回転椅子鈍化　藤井寺市　西　いわを
ぼろぼろになっても私の句帳から　富田林市　中村　優
線香の匂いが好きな母孤独　山口県　高崎　雀声
春風と共に女は美しい　泉佐野市　阿萬　萬的
ヨットハーバーおもちゃの色に陽が当る　名古屋市　越村　枯梢
情け無用ただ一人だけ欠け徳利　高槻市　若柳　潮花
妓もう一万円へふり向かず　倉敷市　小幡　里風
意地張れば逆立ちしなければならず　尼崎市　黒川　紫香
現実は戻れば虹の橋はなし　八戸市　島田　昭治
もう五十誠意とったら零の僕　寝屋川市　宮尾あいき
不況風沈丁花の香がなごませる　島根県　岩田　三和
これ以上醗酵させたら罪になる　大阪市　北　勝美
カミソリは人間味まで剃りおとし　唐津市　岩崎　実
奨励の麦よみがえる揚雲雀　新宮市　大矢　十郎
着いたかと長距離廻すも親である　大阪市　小谷　清女
汗かいた一万円にある重み　米子市　佐伯　越子
お茶室の静かな中にある動き　東広島市　高橋　鬼焼
卵割る妻の指から春をしる　大阪市　欄　蘭
闘病記孤独に慣れて目を閉じる　旭川市　朝倉　大柏
五線譜をぎりぎり埋めて母の音　京都市　山本規不風
でたらめの宛名黙って届けられ　川西市　戸田　古方
ティー・バッグ煎じ薬のようでいや　岡山県　岩道　博友
露店でも倒産したか職を変え　倉敷市　斎藤　通風
釣上げて糸切る議会の深海魚　岡山市　清水金太郎
真実を語れば逃出す奴ばかり　唐津市　田中　紫浪
新築の何処を今月払い込み

広告の折り込み母の新聞ね　唐津市　桑原　掬治

目に涙浮べて女強くなり　唐津市　山下　勝一

母さんに馴らされ一家の納豆好き　米子市　石垣　花子

握る程指より漏れる砂の性　米子市　林　瑞枝

ミナミの灯見てから下戸は放っとかれ　堺市　玉井　邦晴

揚げ幕へ大見得切ってはいりたし　唐津市　三浦ひろ坊

水溜り避ければ犬に咬まれそう　和泉市　西岡　洛酔

恐ろしい事です自分を知るなんて　大阪市　神谷凡九郎

巣立っても親の視線を背に感じ　米子市　小西　雄々

百蕾の辛夷に楽しい明日があり　寝屋川市　小林鯛牙子

文盲の母芯のある人の道　鳥取県　鈴木村飄子

薄給を運ぶ蟻です我が運命　八戸市　下長根倉蔵

背を向けて帰る我が子の背寒し　尾鷲市　渡辺伊津志

芝生から雑草よそ者のよう抜かれ　岡山市　井上柳五郎

芽刈り唄流れて出雲に春が来る　出雲市　石倉芙佐子

距離のない仲での糸をたぐり合い　岡山市　串田句昧地

現代児うかつ説法を跳ね返し　唐津市　筒井　朴竜

戦友会生きてる倖せかみしめる　大阪市　白石　潔

恥じらいの仕草に脆い男心　大田市　藤田軒太楼

成長へ論争してると受取らず　藤井寺市　中原比呂志

棺桶の最後の釘を軽く打つ　寝屋川市　江口　度

趣味が仲取り持ち老いの恋実る　鳥取市　北野　天人

倖せのための苦労は買ってゆく　松江市　黒目　大鳥

「岸壁の母」聴く母はいつも泣き　大和郡山市　森田カズェ

大国のでよう気になる北の海　倉敷市　中津伊勢吉

嫁の座で見付けた姑にあった癖　出雲市　高橋可保留

ピタリ効く薬と小言副作用　岡山県　池田　半仙

読経する余生の日課小半とき　生駒市　草深　酔升

着ぶくれを笑う夫もはや六十路　宝塚市　吉田　笑女

食べるだけ食べて女のうさ晴らし　貝塚市　行天　千代

泣き顔をふとんにゆっくり見せにゆく　出雲市　板垣　夢酔

学舎の螢雪の歌夢をのせ　倉吉市　田民　碧水

長短があった日日よカレンダーはぐ　羽咋市　三宅　ろ亭

〔評〕雑詠の選は、機械的に処理出来ぬ要素が幾らもある。巻頭の千翁さんの作品は、三句が相擁して作者の安穏な心情と家庭を表現している。どの一句を落しても価値(味)が著しく低下する。嘗て四句の連作（起承転結の味）が流行した時期があったようだが、一つのテーマを三句に纏める試みも興味のあることだ。甲吉さん、何気ない叙景ながら句格大きく鮮明である。千代さん、智子さん、綾女さんの近親者への追慕は、大袈裟に云えば作者の歴史で貴重だ。弘朗さんの一徹な虫、日満さんの父の過去、これらは作者自身であるし、夕花さんのはご子息の怪我から生れたもの。幸、タカ子、美和子さんらの句もそれぞれに只今の心の吐露やつぶやきであるようだ。殊にタカ子さんの若さがうれしい。寿馬さんは、死後なお安逸を好まぬ父の、生前の生活信条まで窺えて力強い句になっている。白星さんは、白星さんらしい背筋の通った人生批判とともに、今月は繊細ないたわりの心情を示された。下五の軽い表現ながら味のある用語はベテランらしい。道夫さんも些細なものを見逃がさぬ目を持っている。おいおい大きな目標を詠み、新しい措辞に工夫を凝らすことだろう。美幸さんの第一句は下五で生き、第二句は下五に疑問が残る。修史さんは稍々抽象的な句と具体的な句とを使い分けて好調ぶりを発揮された。虎秋さんの句にも句の裏に長いドラマがひそんでいて、文字通り一味ちがう作品に仕立てられた。珠笑さん、爽やかな気分に夕焼け空を演出させる。葉士人（よしと）さんは穿ちの妙味を心得ておられ、佳雲さんは、自分を俎上に載せるタイプである。五月七日から大相撲が始まった。川柳も相撲と同じに心技体が大切であると思う。心技は云わずもがな、体とは作者の作句までの知識教養など、蓄積された良質の土壌の事である。

絶筆

小浜牧人

前略―日頃はご高配をいただき御礼申しあげます。総甫さんを通じてご連絡申し上げたように本社句会の選を仰せつけられながら欠席しましたことを心からお詫び申し上げます。

健康管理には充分注意しながら不覚にも風邪をひき、それがため持病のぜん息が出まして夜が眠れません。

大事をふんで本社句会を欠席、御迷惑をおかけいたました。

貞山氏の喜寿祝賀原稿は、写真が入れば五枚ほど、写真が間に合わないときは七枚程度とのことでしたが、入選句が大分ありますので、写真なしで七枚ほどにしました。急いで書きましたので誤字や原稿でお気付のところはご訂正、ご添削のほどを御願い申し上げます。

五月八日　　牧人拝

一三夫様

川柳塔社が誇る好作家、小浜牧人氏が五月十日夜八時半ごろ急逝されました。

氏は川柳塔社の常任理事、または川柳塔賞の選考委員として活躍され、本社としても得がたい作家でした。

「西宮北口句会」も氏の指導により、着実に柳界の一角に輝やきはじめたところでした。惜しい方を失いました。

カットは48年度の路郎賞獲得の記念写真です。

▼次号には関係者の方に追悼文をお願いしてあります。告別式が5月13日で、校正が17日に出るため、どなたにも原稿をお願いできず、ここに故牧人氏の〝絶筆〟を掲げ、心からの哀悼をささげます。

▼65ページに関連記事。

―編集部―

—谷町は丁稚車にきつい坂—（形水）

谷町は坂だった

伊藤入仙

東京に震災があった年の大正十二年の四月に淡路州本に近い漁村からと、洛南伏見、淀川の三十石船の船宿からと、小学校を出て、大阪船場の毛織物問屋へ、丁稚の修行に来た二人の少年があった。

本町の本家と安土町の別家と、勤めた店は違ったが、同族同業のことだから、肩上げのした木綿縞の着物に前掛け、商売ものの羅紗の厚司がユニホームで、小さい鉄輪の丁稚車を引いて、木練瓦で舗装された電車道で出逢うと笑い合う、知り合いになっていた。

大正も末期、小店員と呼称も変りかけていたのが、古い船場のしきたりの中、丁稚、番頭の序列もきびしく、起きてから寝るまでが気のゆるせない住みこみの勤めだった。下手な丁稚物語を書く気はないが、とにかくテレビドラマの船場ものに出てくるアレで、奉公といってもよいコネがなければ格式のある大店には雇ってもらえなかった時に、船場の成功者を主人に持てたことは学歴のない少年の誇りで、何んとしてでも商魂を養い、金儲けの道を習い、ひとかどの商売人にならねばと、希望に燃えていた二人に五十四年の日が経った今、初志貫徹して、谷町に近く四階ビルの城主におさまって、紳士服のメーカー、オーエスケーの社長に成功しているのが大坂形水さんであり、京都祇園の片隅で小さい料理屋の親父に成り下っているのが私である。

交通機関の変遷で、没落した船宿に生れ、幼い時から、中書島遊廓の宿場女郎達に抱かれて遊び育ったそうな、私は、青春を楽しみすぎたらしく、早く船場からほり出されて、京都へ帰り、京呉服の行商を始めて大阪通いをした得意先が堀江、新町、今里の女の里や料理屋の仲居部屋だった。そんな時川柳を知り、京都の川柳界にひっぱり込まれていた。

戦争で商売が出来なくなり、終戦の時は海軍航空隊の兵隊だった。三転四転して、うわべはきれいに喧伝されていても、脂粉と酒の香がただよい、夜になれば万とひしめく、女の世界になる祇園に住みついている宿命の私とは対照的で、丁稚学校のエリートと非行少年の違いである。その非行少年を誇らず、さげすまず、地位と貧富を越えたつき合いを続けてもらい、その友情にあまえていられるのは川柳だろう。

形水さんに川柳を作らせたのは亜鈍さんだと思う。主家を離れて独立当時の阿波座の店で、店員さんばかりの小集に招かれて、呉服の荷を駅前に預けて出席したことがある。今も社長室に掲げてある、路郎先生の筆、「足踏するな」の額の下で、先生ご夫妻同席のはれがましい会だったが、亜鈍さんがリードしていた。（この月で百回を数え、川柳塔5月号によると、博泉、一念、亜成、野生、一扇の五人の社員が本社新同人に紹介されている）オーエスケー川柳会はその時が芽生え

で、阿波座から五十年かかって実のらせる。気負わず、あせらず手堅く、典型的な大阪商人らしい人柄が川柳の面にもうかがえる。

その形水さんが古稀を記して、句集〝谷町〟を刊行されることは誰よりも嬉しいことで、谷町という表題になつかしさと郷愁がある。大阪でご年輩のお方ならご存知のことと思うが、菓子屋の松屋町、羅紗屋の谷町で、三丁目辺りを中心に、背広以前のこととて、今の紳士服メーカーの前身が既製品屋とか、つぶし屋とか云われて店で羅紗を裁断して、マント、トンビ、厚司等に仕立てて売る問屋がせまい電車道に軒をつらねていた。

そんな時、厚地の重い反物を本町四丁目から大八車に積んで配達させられるのだが、本町橋を渡ったとこから登り坂で、骨屋町を過ぎた東は舗装がなく、小石の飛び出たながら道で、やっと登り切った時の汗に風を入れた快感を形水さんも体験したことであろう。

そうした思い出のとこに社屋を建てて本家を主軸にして百人を越す、一族郎党の中で最高の成功者、形水川柳には、他にない人生経験から滲み出た味と教訓がある。

多作家ではないが永年作りためた作品が一冊にまとめられたら、商都大阪の商社マンは是非読んで、座右の銘とすべき好書になるだろう。

オーエスケーの句会には始めから、白柳さんと今は好郎さんとで一緒させてもらい、常務の兄さんとは同じ店の先輩で世話になっていること、奥さんのお母さんにもごひいきになって、親しくしてもらっていたこと等、書けばきりがないので、このへんでおいて、句集刊行の日を楽しみにお祝い申上げる。

谷町の思い出

不二田一三夫

形水氏や入仙氏と同じように、ぼくにも谷町の思い出がある。父の職業である印刷の関係で、少年時代のちょっとの間、谷町二丁目あたりに住んだことがある。

その頃、本町二丁目から東へ、内本町、その次が谷町三丁目と電停があった。内本町の電車通りに〝本町倶楽部〟という映画館があって、よく通ったものである。「ターザン映画」の第一回作、エルモ・リンカンというボクサーあがりの主演映画もここで観た。また当時の話題作「髑髏の舞」もここで観た。岡田嘉子が映画に初出演というのだから随分古い話である。女形時代の衣笠貞之助監督の「自転車お玉」という主演映画もここで観たことだが、保存しているこれらのプログラムは大正十年のものだから、形水氏や入仙氏が故郷の淡路や伏見から大阪へ来られたのとほぼ同じころである。

内本町の電車通りは3と7の日に夜店が出た。谷町三丁目の常盤通りは9の日、谷町四丁目の農人橋骨屋町通りは2の日が夜店だった。（早く大人になって串カツを十本ぐらい食べたいと思ったのもその頃である）

自転車の乗りかけで、走れば坂のため超スピード、止め方が分からずマッハ族そのままだ。大手前筋の坂から松屋町筋の人混み突入を避けるため、みずから自転車もろとも横にぶったおしたまではよかったが、勢いあまってコマをぶっつけたようにクルクル飛びこんだのが銭湯だった。近所の商店街の人たちが物音に驚き、とび出してきて、

「無茶なボンさん（丁稚のこと）やナ」

そんな声を聞きながら、重い自転車をかついできつい坂をのぼって行った。手足が血だらけのまま……。

うみなり川柳会十五周年並に

加藤貞山喜寿祝賀記念川柳大会

小浜牧人

この日鳥取市はこの地方には珍しく雲一つなき日本晴れ、新緑に風も爽やかな日であった。記念大会に大阪より参加の一行七名（八木摩天郎、川村好郎、菊沢小松園、岩本雀踊子、笠原吸江、橘高薫風、小浜牧人）は定刻二時五〇分日交バス鳥取終点へ着いた。

森田茗人未亡人、小林由多香うみなり会長河村日満鳥取川柳会長、加藤貞山その他多数の柳友に迎えられ、昨年八月の茗人忌川柳会以来八ヵ月ぶりの鳥取柳人との再会である。尚西尾栞副主幹は旅行先岐阜より、板尾岳人さんは社用の為次便のバスにて、樫谷寿馬さんは明朝の汽車にて来鳥の予定である。

宿舎へ入るまでの数時間を割いて加藤貞山氏の御厚意に依り国定公園浦富海岸の島めぐりへ出発する。鳥取市より車で約三〇分蒲生川口の乗船場岩木桟橋には我々の為に遊覧船浦富丸が待っていた。定員六〇名の船に我々七名と鳥取の六名の小人数で貸切りである。折柄観光を終えた客を満載した遊覧船が一隻また一隻帰ってくる。好天に恵まれた島めぐりに船で往復するだけでは勿体ないなどと誰かの声があり、カツ酒やら焼きイカやらを買い込んで乗船、後部甲板へ陣取る。船長のガイドよろしく船は川口を下り遙か西に大砂丘を望見しながら海へ出る。

紺碧の海は手を浸ければ染まりそうに青く澄んで波一つない。エンジン音も快調に網代灯台を過ぎいよいよ山蔭松島へさしかかる。この一帯の地質は花岩層だと言う。

日本海の荒波に激しい海蝕を受け複雑怪奇なリアス式海岸であり浮かぶ島々は甌穴・洞窟・洞門を穿ち三次への奇形の世界を海上に現出している。海賊島弁天島観音島太郎兵衛島等いずれもその名に因んだ伝説を持っている。

島々の間を縫い挟い水路を進んで行くと島の岩肌に数羽の鵜が止っている。鵜は沢山棲んでいるらしくあちらこちらの島の岩肌に鵜の糞が雪のように白く望まれる。この辺り鵜には絶好の漁場であろう。船は菜種五島へ接近する。島の松の根方に菜種の群生があり黄色花を咲かせている。何故この五島だけに菜種が育っているのだろう、しかし長年同種間で繁殖しているせいか退化して草花のような小さい菜種の花のようだ。ここを回ると唯一の安山岩の島だと言う黒島が沖合にぽつんと浮んでいて島めぐりは此処で終点である。

海上の微風に酒は飲むより覚めてゆき島々との応接に約一時間の観光を終えて桟橋へ帰着、直ちに今夜の宿舎砂丘荘へ向う。大砂丘の西入口の一角に砂丘荘は白亜の建物である。

玄関の手前に「月荒き砂丘は古邑うつむとや暁水」との句碑が建っている。我々には二階に部屋が取ってある。このベランダからの眺望は素晴しい。大砂丘のうねりの遙か向うには先程訪れた松島の沖が夕陽を受けて光っている。

砂丘の風紋が美しい模様を描いて前面に広がり一大パノラマを見るごとくである。

一風呂浴びて旅の汗を流したところで本大会の主賓貞山氏主催の喜寿祝賀並に大阪より参加の一同を歓迎の宴である。宴に先立って貞山氏のご令息のこの度の喜寿祝賀川柳大会開催についての懇篤な謝辞が述べられ大阪より参加の我々に厚く礼を述べられる。また貞山氏はうみなり川柳会員の温い友情と川柳塔本社より大挙応援参加の我々に深く謝意を表せらる。挨拶が終ると早速盃の献酬が急ピッチである。

昼間景勝の地を訪ねた軽い昂奮もあり千金の宴を互に語り飲み歓をつくして酒量も次第に上る。やがて好例の地元連の貝殻節の合唱に宴を盛り上げ喜寿の祝宴と懇親の目的を十二分に果して本日の貞山氏の御厚意に深謝しつつ乾盃を捧げて宴を終る。

宴後部屋へ引揚げたところへ栞副主幹がいま鳥取駅へ着いたとのお電話である。待つ程もなく長時間の汽車の旅のお疲れもなく元気にご到着である。九時少し過ぎ一同就寝。

大会当日も昨日に続き好天気である。九時バスにて宿舎を出発大会へ向う。会場は鳥取駅の西白砂荘三階の大広間である。既に四、五〇名の熱心な参加者が作句に余念がない。ぞくぞくと参加者が詰めかける。われわれは会場へ入場後しばらくは久し振りに会う柳友との応接に遑がない。

米子の千代さん瑞枝さん、花子さん、松江の鶴丸さん、いづもの緑之助先生のお顔も見える。定刻一〇時両川洋々氏の手馴れた司会のもとに開会。先ず小林会長の本日の盛会をステップとしてうみなり川柳会の前進を期すとの心強い挨拶、つづいて俳人村尾草樹氏の祝辞、本社小松園渉外部長の軽妙な挨拶があり、終って加藤貞山氏へ喜寿の記念品並に花束の贈呈、更に貞山氏よりうみなり会へ寄附の発表があり、最後に貞山氏の謝辞である。同氏は歓びと感激で涙を浮べて大阪在住時代から続けた長い川柳生活でこんな嬉しいことはない。今日の日を胸に刻んで今後への励みとしたいと所懐を述べ謝意を表される。これで午前の部は終りである。一同白砂荘玄関にて記念撮影を行い中食ののち休憩。

一時柳話、柳話は川村好郎先生である。

NHK川柳の投句者の実例を引いて作句への努力を強調される。「もう七〇才」と「まだ七〇才」との考え方の相違、積極性を持たねばならない。一事を続けてゆく事は偉いが前轍を追って踏んでゆくのでは意味がない、絶えず前向きに努力して続ける事が肝要であると洗錬された話術で深い感銘を場内へ与えられた。更にうみなりが全国へ轟くうみなりに発展するよう激励の言葉で柳話を終る。愈々選句被講である。

場内一段と緊張のうちに各選者が別記の番号をはじめ名句佳句を発表、呼名も力強く、「〇〇です」の呼名が爽やかであった。

席題　「履歴」　　**河村　日満選**

人　釣書きの中で履歴がかしこまり　福田　保子

地　履歴もう捨てた夜警の靴が鳴り　森田　熊生

天　川柳の履歴は永し雲の果て　下田　善堂

席題　「晴れる」　　**尼　緑之助選**

人　祝福の鳩の乱舞が目に痛い　中森葉士人

地　まぶかれて休む漁船へ空が晴れ　河村　日満

天　やり直す夫婦に晴れ間覗いてる　両川　君江

兼題　「成長」　　**小林由多香選**

人　馬鹿になる術も覚えて職変える　小川源太郎

地　親のない子も成長した背広　菊沢小松園

天　成長した順に捨てて行く故郷　岩本雀踊子

兼題　「長寿」　　**八木摩天郎選**

人　倖せな七十七を病い抜け　菊沢小松園

地　曽孫の手を引き橋の渡り初め　下田　善堂

天　伯耆富士晴れて麓は長寿村　西尾　栞

兼題　「うみなり」　　**橋高　薫風選**

人　うみなりの街で男が大志抱く　福田　保子

地　海鳴りをきけば鳴り出す漁夫の墓　八木　千代

天　うみなりは遠し砂丘のはるかなる　福田多可志

兼題　「竹」　　**西尾　栞選**

人　竹竿が落ちておしゃべり止めにする　尼　緑之助

地　竹すだれ自然の風を通すなり　下田　善堂

天　竹天へ向って自由を主張する　森田　熊生

特別課題「商人」　　**加藤　貞山選**

3　商人の汗で育てた人ざわり　八木　千代

2　大阪の灯に商人のど根性　大塚　豊生

1　商人の胸で家訓が脈を打ち　両川　洋々

梅雨

森田カズエ選

川蟹も背のびしている梅雨晴れ間　文平
晩鐘の余韻重たくとどく梅雨　虎秋
黴生えて来そうな靴を今日も履く　木魚
梅雨だからこそ紫陽花の美しい　道子
梅雨あけを待って新築急ピッチ　代仕男
母の腰案じて梅雨の空を見る　右近
寡婦の目の疲れに淋し梅雨の音　洛酔
梅雨すんで置き傘人間不信感　弘生
梅雨も良し我が家に布団乾燥機　ひろ坊
梅雨の日も爪皮掛けて行く稽古　紫浪
早乙女の抒情を消した田植機で　重人
梅雨空の晴れ間へウンと背伸びする　青丹子
心まで虫干ししたい梅雨が明け　茶人
祈られて神も空梅雨困りはて　翁童
梅雨の火事犬立去らず濡れている　規不風
梅雨空に傘を持つ人持たぬ人　綾女
梅雨つづく飯場に男持て余し　邦晴
職安へ犇めく列に梅雨無情　本蔭棒
降りやまぬ雨の日銭も底をつき　思月
洗濯機フル回転の梅雨晴れ間　きょう子
つかの間の梅雨の晴れ間を緑生き　一路
雨蛙拗ねて空梅雨声出さず　句眛地
空梅雨にまたも田植の時季がずれ　夕路
心まで湿める梅雨期に督促状　里風
特異体質草木の育つ梅雨に堪え　竹馬
防災の審議は梅雨が明けてから　比呂志
出不精をなお出不精に長い梅雨　七面山
梅雨あけを待ちわびている子の水着　喜代美
空梅雨がつづき花壇は欠伸する　祥月
銀婚へ梅雨つくる詩一ッ　深星
追い打ちをかけて被災地梅雨に入り　軒太楼
雷が鳴って梅雨明け疑わず　正則
再建のめど立たぬまま梅雨に入る　凡太郎
梅雨までにブーツは履き潰ぶしておこう　寿馬
傘だけが一本多い梅雨の旅　東天紅
梅雨空へ今日も釣竿ためらわず　勝美
梅雨晴れ間やっぱり傘を持って出る　隆子
梅雨晴れのデートのブランひげを剃る　岩光
空梅雨に矢張り天が憎まれる　凡九郎
佳
新調のコート楽しい梅雨にする　満津子
手を抜いた工事を梅雨がえぐり出し　洋々
今日も降る梅雨には梅雨の花が待ち　可住
紫陽花をみとれる梅雨があればこそ　静枝
出不精も梅雨に喪服の用が出来　花子
人
梅雨しきり蟻にひもじい日が続き　宵明
地
梅雨の海漁夫は生活の船を漕ぎ　越子
天
それぞれの色で飛び石濡れる梅雨　〆女
軸
お隣りの干し場も借りて梅雨晴れ間

定刻

森田布堂選

門限の灯は僕を待っている　勝美
定刻にずらりと並ぶ反対派　凡太郎
定刻に揃った視線にらまれる　たけ志
定刻も要らない花見に隣組　東天紅
定刻にもう売り切れた宝くじ　優
定刻を過ぎて顔出す太鼓腹　本蔭棒
定刻に出たばっかりに事故に遇い　勝一
門限へ足のもつれた肩を組み　代仕男
定刻のように隣のピアノ鳴る　無人
定刻のベルが議場をひきしめる　登美也
糾弾は定刻通り始められ　保夫
遅刻した罪だと重荷背負わされ　軒太楼
定刻をチョット遅らす愛もあり　深星

定刻高らかにウエディングマーチ　道子
原案を潰す気定刻から力み　竹馬
定刻へ長蛇の列が疲れ果て　一路
出席はしたが時刻にずれが出来　虹汀
門限が気になる娘を持つ父として　茶人
定刻に出合うあの人名も知らず　越子
定刻はとうに過ぎてる夕桜　方大
定刻どころかおひらきの頃顔を出し　凡九郎
禅僧に定刻きびし魚板打つ　公平
私語一つ無く定刻を待つ入試　花子
定刻へそわそわと待つ呱呱の声　どんたく
意気込んで来た定刻をずらされる　可住
無慈悲みたいに定刻のベルが鳴り　古方
遅刻して罪は時計に被せている　カズエ
面会へ定刻告げに来た看守　紫浪
定刻をたがわず死刑の朝が明け　洋々

吟題課

佳

時の記念日というに定刻守られず　春日
定刻に遅れ敗者のようにいる　思月
定刻に祝電だけが届けられ　不二
定刻を守って小心安堵する　比呂志
散歩道老人定刻どおり来る　夕路

人

宴会の時は定刻皆守り　美紀子

地

定刻に帰らぬ船を追う無線　天人

天

黙祷へ一斉に鳴る原爆忌　悠泉

軸

出棺の時間がずれるすすり泣き

アルバム

藤井春日選

アルバムが追つかけている子の育ち　大柏
青春はアルバムの中で生きつづけ　比呂志
アルバムに召された陸軍二等兵　東天紅
アルバムの竹馬の友も腰曲がり　句眛地
アルバムのこのあたりから妻になり　凡太郎
アルバムに子供の頃の夢を追う　文平
アルバムに匂う若き日のロマン　登美也
アルバムのもんぺの妻はまだ若い　虎秋
アルバムが新婚旅行語り出す　道子
アルバムの童女も今じゃお年頃　軒太楼
アルバムの笑顔若くてなぜ逝った　祥月
アルバムに子の生い立ちが書いてある　夢酔
アルバムへ年輪刻んだ顔並び　喜代美
アルバムの滅私奉公褪せている　宵明
アルバムの母が笑うて話しかけ　〆女
嫁ぐ日へアルバム嫉妬の種はずし　花子
アルバムの頁を飾る呱々の声　岩光
アルバムの剝がした頁問い詰める　どんたく
アルバムの女房にあった美しさ　雀声
アルバムの遺影の写真決まらない　古方
アルバムの人に残火ふせておく　勝美
両親の恋をアルバム物語り　思月
新婚のアルバム未来へ盛った夢　翁童
アルバムに裸の僕が這うている　カズエ
アルバムも古び夫婦もまた古び　七面山
アルバムの見せたいとこは見て呉れず　佳雲
アルバムの二人個個の道歩く　凡九郎
アルバムは何も語らず過去を秘め　美紀子
アルバムの女を子供にほじくられ　青丹子
アルバムのページを飾る呱々の声　岩光
アルバムの四国巡りと云うサイン　紫浪
アルバムに貼れぬ一枚肌に持ち　方大

佳

人生の流転アルバム語りかけ　洛酔
アルバムに亡き母四十の顔残し　多賀子
アルバムに時代を語る髪かたち　天人
アルバムをひっぱり合いの里帰り　きく子
黒煙のSLアルバムの中に生き　勝一

人

アルバムと私を孫が見くらべる　無人

地

アルバムで記憶を辿る老眼鏡　代仕男

天

アルバムを開けば軍靴の音がする　本蔭棒

軸

アルバムに恩師詰襟召し給い

初歩教室

題 ―「机」―

本田恵二朗

過去を詠んだ句、現在を詠んだ句、未来を詠んだ句と分類して、鑑賞してみる癖を私は持っている。

自分の過去を思い出して詠んだ句は、叙法も思い出ムードがにじみ出していないと古臭いと解釈されるおそれがあるので、配慮が必要であるが、楽しさや、喜びや、そしてまた悲しみなどを思い起して、反芻したり、反省したりしている句は価値ある句であろう。自分の現在の位置や環境をふんまえて、色々な角度から見つめて、生み出した句は、年齢相応の句境や句材をとらえることが多いから一番適切不難な句が生れるであろう。

未来を想い、夢見ての句は、作った句、フィクションの句だと感じ取られることがあるが、バラエテーゆたかな句を創作できるから楽しい。過去、現在、未来のそのどれでもよいのだが、現在を思索し、掘り下げた句が、一番迫力のある句となるのではなかろうか。

無事過ぎた停年机ありがとう　深星

もう一度机なでてる停年日　同
（大過なき停年机をそっと撫で）
仏壇にそわぬ大きな経机　静子
みかん箱机にした頃なつかしみ　頼次
（蜜柑箱が机でしたと立志伝）
机上論振りかざしてみるが動かない　同
（反響がとんと聞こえぬ机上論）
机を並べた友がまた一人へり　梁川
（なつかしい机友一人へり一人へり）
新任が机の位置かえ新鮮味　同
（机前向きにして新主任のファイト）
上役がかわり机の位置もかえ　柳五郎
（前句参照）
交番の机善意の花も咲き　同
（交番の机善意の花一輪）
勉強はコタツで机はほっとかれ　露芳
（勉強はコタツ机は漫画本）
附属品でたべた机に夢もたせ　同
（あれこれと貼って机に夢がある）
高校まで使える机祝てやり　瓢太
（高校まで使えと机祝われる）
机上の空論では説得の力なし　同
（説得力ない机上論を押しつける）
机よりコタツで宿題よくできて　静枝
（机よりコタツで宿題よくはずみ）
退職の勧奨きびし机なく　同
（退職勧奨が机を奪い取り）
こね上げた机上論には実も軽い　善四郎
（こね上げた泥細工のような机上論）
中年期机になれて太り出し　同
淡い恋そんな昔を知る机　昭治

子の机テストのときだけこき使い　同
（テストの三日間だけかじりつく机）
派出所の机主人いつも居ず　正
（派出所の机平和な日が続き）
花置かれ机表情生き生きと　同
（一輪を置けば机が生きてくる）
（一輪を置かれて机若返り）
この机に座れば停年もう間近か　紀久子
（嘆願の書類机で眠ってる）
嘆願の書類机で眠らされ　同
経机露を含みし沈丁花　貞祐
被肖明け机が炬燵隅へ押し　同
かけ出しは机上プランの域を出ず　同
（かけ出しのプラン机上のを域出ず）
机にも花挿している新入社　三十四
（新入社の机一輪匂わせる）
ガリ勉の机は冷たい肌をする　同
（ガリ勉の机冷たく夜が更ける）
判を押すだけの机に回り椅子　同
御机下とある封筒はあとで開け　寿馬
（机下とある封書は一番あとで開け）
難問解く机に亡兄の小刀傷　同
（亡兄が匂う机で解く難問）
お茶を汲むための机をあてがわれ　無人
三尺の机で兆の予算組む　同
午後十時机の主は眠りこけ　同
（二十二時机の主が船を漕ぎ）
実力を競う机が小さすぎ　伊津志
テーブルに座る仕草もテストされ　同
専用の机を持って漫画読む　同
（専用の机もろうて漫画読む）

現場から机上へ抗議太い声　正則
（現場から机上へ抗議がはね返り）
出た時のままの机に帰省告げ　同
（出た時の机に錦着て坐り）
受付の机に笑顔たやさない　同
（受付の机笑顔を惜しまない）
それぞれに別の世界を持つ机　幸
机の汚点に私の過去がうずくまる　同
（文机のしみなつかしいおさげ髪）
春の午後机の上もなまけてる　同
（春おぼろ机の午後に睡魔来る）
寝室に机を置いた書斎です　翁童
（書斎兼寝室という古机）
父祖三代机に弱気叱られる　同
（三代目机に弱気叱られる）
倒産の机につもる薄ぼこり　同
（倒産のほこりが積る事務机）
その昔机並べた仲の妻　利美

カンニング見て見ぬふりをする机　同
手で顎を支えて思案する机　同
（思案の顎机のひじに支えられ）
（思案の顎机のひじが持て余し）
新品の机と鞄に飛び起きる　静佳
肥後の守錆びてる母の古机　同
三浪を支えた机まだたっしや　同
（三浪に耐え抜き勝った机撫で）
初恋の涙おぼえている机　英子
順々にゆずった机の傷の数　同
（順々にゆずった机の成長記）
文机が母の青春物語る　同
定退日机の疵の私語を読む　露杖
経机拭いて心経の声を張り　同
（仏縁の温さにひたる経机）
机辺の花匂えど心の傷疼く　同
（机上の花匂えば疼く恋の傷）
帯きちんと結んで祖母小さく　天人

子の机借り一日を締めくくる　同
机一つ置いて事務所の顔作る　同
新庁舎机は予算の外におり　同
（新庁舎机は古いまま並び）
絵に画いた餅でしかない机上論　慶彦
判を押すだけの机が巾を取り　同
机から机へ人事の異動メモ　同
定年も間近か古びた机拭く　保夫
横向いた机は中間管理職　同
OLの机とわかる花禅様　同
ラブレター書く日の机炎えている　寿子
雑学の父の机にある温み　同
青春もあったであろう古机　同

題―順―6月20日締切（八月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
㊐七一一　本田恵二朗

麻生路郎編
評釈　古川柳の味

八木摩天郎清記

早鐘に和尚を見れば猿轡

じゃん〳〵〳〵〳〵とお寺の鐘が鳴る。何事が起ったのかと村人が馳けつけて見れば和尚さんが、猿轡をはめられている。小金をためているという噂のお寺へ盗人が這入ったのであった。

母親はもったいないがだましよい

母親は世相に疎い上に、盲目愛だ。是非コレコレでお金が要るといえば、何んとかしてくれる。そこをつけ込んで、嘘を云っては母の臍くりを絞る。絞られても気がつかない。もったいないがだましよい。である。

春の音にしては七種（ななぐさ）**忙しなし**

春はゆったりしたものと思うのに、正月の六日は七種を買い、その夜と七日の暁に再度これをはやすのである。この音が春の音にしてはいかにもせわしないと云ったのだ。俎になずなを置きその傍に薪、庖丁、火箸、磨小木、杓子、銅杓子、菜箸等七具を添え歳徳神の方に向いて先ず庖丁を取って俎板をはやしたてるのである。その時「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきになずな、七種」と云うのである。昔の七草とは、芹、なずな、ごきよう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろの七つだった。

第三百二十三回（五十三年度第五回）

大萬川柳

「離れる」

入選発表

選者　川村好郎
投句総数　三百六十句
入選　五十三句

ふるさとを離れ再起の星に起き　今治　宵明

新婚の夢一ぱいにいま離陸　大洲　暁明

立前と本音それなりの距離があり　鳥取　露杖

はなればなれの心を刻むハト時計　富田林　花梢

片思い少し離れた席を選り　鳥取　茶人

離れ住む他人の水はにごり水　島根　三和

親のすね離れ税金掛けてます　寝屋川　小路

再会を信じる月は冴えている　八尾　鬼遊

離れても愛の絆は鼓動する　和歌山　寿子

欲得を離れた苦言がよくこたえ　西宮　百酒

未練もうないのに憎しみ離れない　倉敷　素身郎

寝屋川　恵美子

領海は離れ小島を見直させ　箕面　一本杉

ドン底の過去は冷たく離さない　守口　勝美

車窓やや離れてひそと送る女　宝塚　静馬

一人子の離れる汐を知るあせり　兵庫　可住

入学をしたら神仏から離れ　枚方　珠笑

肩書から離れてみたい日の失意　大阪　文秋

みかんそろそろ親を見離す色になり　大阪　あいき

離れても心は同じ星を見る　和歌山　和子

他人には予想をされていた離婚　倉敷　素身郎

町並を離れて歩く初心な恋　岡山　金太郎

さいはてにいても絆に縛られる　大阪　道子

子供等はつんぼさじきにいる別離　堺　天笑

本当は離れたくない捨て台詞　倉敷　方大

人間の離婚を笑う枯松葉　岡山　静佳

欲得を離れた汗のさわやかさ　和歌山　としよ

負け犬のあわれ後ずさりして吠える　堺　憲祐

万一を思わぬでもない離陸　大阪　公平

離れたい心をつなぐくさり縁　東予　悠泉

椿いま親を離れる音を立て　尾鷲　伊津志

政治家の浮気組んだり離れたり　枚方　優

人妻と歩く二三歩距離を置く　富田林　里風

離れないアベック避けてゆく夜勤　倉敷　柳信

テープまだ離れた船にからみつき　大阪　可保留

出稼ぎの父を気遣う雪となり　出雲　凡太郎

くっつかず離れず夫と春の宵　岡山　公子

欲得を離れたはずの宗派揉め　和歌山　本蔭棒

離れ住むあなたの愛の糸たぐる　奈良　静泉

離任する涙に明日の陽が宿る　鳥取　たけ志

目立たずに離れず従いてきた女房　岡山　本物は燃え盛り

離されて離れて本物は燃え盛り　岡山　たけ志

離れゆく心を繋ぐ糸をよる　大阪　真砂

離れた矢に前進の決意かけ　大阪　真砂

ひと匙を気長に馴らす離乳食　米子　千代

はぐれ鳥焦れば焦るほど離れ　米子　千代

離れたら父の重みがわかりかけ　和歌山　英子

手許から離れた株の値が上り　和歌山　英子

佳句

綱切って泳いでみたい鯉のぼり　大洲　暁明

或る悲劇離れぬように結び合い　堺　邦晴

一枚の辞令が妻と子を離し　八尾　鬼遊

離れたくない夫の墓碑へ名を添わす　大阪　あいき

会者常離されど又逢う夢があり　大阪　公平

人ノ句

解決は宿題として離れ住む
藤井寺　吸江

地ノ句
足元に眼を離せない牛歩です
和歌山　武雄

天ノ句
距離おいて男の素顔たしかめる
大阪　好一

選者吟
離れゆくこころ追うからなお離れ

昭和五十三年度ベストテン（四月現在）

一	千代	九〇	米子
二	好一	九〇	大阪
三	憲祐	八〇	堺
四	武雄	七〇	和歌山
五	百酒	七〇	西宮
六	花梢	七〇	富田林
七	一二三	六五	堺
八	幸	五五	和歌山
九	どんたく	五五	神戸
一〇	真砂	五〇	大阪
一一	静馬	五〇	宝塚
一二	筒子	五〇	倉敷
一三	綾女	五〇	東大阪
一四	正博	五〇	和歌山
一五	凡太郎	四五	岡山
一六	道子	四五	大阪
一七	あいき	四五	大阪
一八	鬼遊	四五	八尾
一九	暁明	四五	大洲
二〇	利美	四五	尼崎

以下略

昭和五十三年度第七回

「答」三句以内
線切　六月二十五日
「きっかけ」三句以内
第八回
締切　七月二十五日
投句先　〒593　堺市堀上緑町一―三―七藤井一二三方　**大萬川柳係**

第14回の集り
大陸川柳人同窓会

時　昭和53年9月21日夕開会22日昼間自由行動23日朝解散

所　福岡市　はかた会館　福岡市中央区薬院4・21・1

費　一万五千円（二泊四食特別料理共）前金五十人定員制

句会　22日16時より18時まで（句会のみ出席は会費無料）

題・鄧小平・夕日・旅順・北鮮・太宰府・柳川・各二句

※特賞各題一句に国宝「金印」の複製印一ケ呈賞。

観光　22日朝食後柳川または太宰府へ自由行動案内します。21日22日各一泊二食の方の会費は八千円（泊らずは五千円）今年不参加出句は葉書大用紙一枚一題二句記・締切9月18日

※9月21日は朝からお待ちしますが17時までに来会下さい。

雅号ぶっちゃけばなし（168）

とよさく

稲田豊作

還暦も過ぎてからのことです。老後の楽しみに、娯楽文芸の川柳をと考えました。姓が稲田なので、雅号を豊作とおどけてみました。人はホー作、呆作とお呼びになります。知らぬこととは言い乍ら、川柳を娯楽文芸と思い違えた迂闊者故、それも致し方のないことであります。

併し入門後は、至極真剣に取り組んでおります。それで相成る可くはトヨ作と呼んでいただきたいのですが……。

本名勇夫、柳歴は若く正に青年期ですが、年齢の方は何時の間にやら。元化粧品販売業、現在楽隠居。

無職（七十三歳）

いなだ

川柳塔柳箋

一冊百五十円・送料二百円
二冊でも送料は二百円です。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼川柳塔社53年度二賞発表句会と同人総会は10月8日（日）午後一時開場。会場は大阪府中小企業文化会館5階52号室で開催（天王寺区上汐町五の二四・地下鉄谷町九丁目下車南三百米―電話771・4096番）

▼52年度ふあうすと賞発表最優秀「矢じるしや吾れも流され行く一人―辰林文珠」優秀「ともだちをほしいとおもうにぎりめし―山本柳化」優秀「ガ島忌や犬の肋とすれ違う―鷹野青鳥」紋太賞最優秀「蛇苺いつか一つの死に出合う―守下彭子」優秀「督促状ひたすら厚い爪を切る―安藤亮介」優秀「再起したらもいちど海を見にこよう―酒谷慶郷」

▼川柳研究四月号で52年度の川柳研究年度賞が発表された。第一席「膝を抱くだけの手にして人去れり―柏葉みのる」第二席「青年のうしろの海が盛りあがる―野田伸吾」第三席「父の日に一日太郎冠者となる―五十嵐さか江」

▼川柳きやり五月号で52年度第10回周魚賞受賞作品発表「ほんとうは聞こえて欲しい独り言―朝草太朗」「坐ってるだけで百歳羨やまれ―黒田茶円」

▼川柳宮城四月号で52年宮城賞発表。最優秀作品「酸性の海から鯛やき君を釣る―渡辺一寸」

▼川柳「路」52年度年間賞最高作品「口髭に飼ってる虫が鳴き止まぬ―高橋けんじ」準賞「空白の日記に傷口が見える―竹原和美」

▼5月4日の日川協主催の氷川丸での総会は、司会・渡辺蓮夫―開会挨拶・中島生々庵副理事長―議長・片山雲雀理事長―経過と会計報告・大井正夫事務局長―提言審議と抱負・堀口塊人常任理事―閉会の辞・藤島茶六副理事長でおわる。出席の本社同人諸氏からの感想など次号でまとめる予定。

▼第25回蟹の目社川柳大会が5月21日に金沢市香林坊・中日文化センター9階で開催。伊藤茶仏氏は（小松市）「絆」の選をされた。

▼わかまつ50号発刊記念誌上川柳大会の「松」を山内静水氏（竹原市）が「進む」を板尾岳人氏（富田林市）が選をされた。

▼第9回北日本川柳大会が6月11日正午から富山県社会福祉会館4階大ホールで開催。兼題―金庫・B級・あの手この手・殴る・悪夢・デビュー（各題二句）席題3題。伊藤茶仏氏（小松市）が選者として出席。投句料五百円（切手可）締切6月5日。〒930富山市豊川町三の七、松岡緑朗方川柳えんぴつ富山の会宛。

▼札幌川柳社20周年記念川柳大会は8月27日午前10時から国鉄エルム会館4階大ホールで開催。―雑詠―七氏で共選・別の宿題は―経験・嬉しい・栄える・近づく・辛抱―各題二句―投句締切七月十六日（投句料五百円・発表誌三百円）投句先〒062札幌市白石区菊水上町四七・佐々木幸蔵あて。

▼53年度噴煙川柳大会は6月4日午前10時から、熊本市花畑市民会館前「みゆき会館」で開催。題は―雨上がり・弾む・湯呑み・ヒント（各二句）投句料五〇〇円（切手可）5月20日締切―〒862熊本市京塚本町五三―一二、七谷方、川柳噴煙吟社大会係。

▼橋本衛門七氏（ふ社）ほか二氏司会による「放談・現代川柳について」（P12）が神戸川柳協会から発行。

▼「風」季刊15が四月一日に発行された。読みもの、作品、などに河野春三氏の、あすを先どりする気魄が全ページに満ちあふれている。（高槻市竹の内町二二〜一、風発行所）郵共五百円。

▼第一回「鳥取県川柳大会号が同作家協会から発行

弓削川柳社創立三〇周年記念

第三〇回西日本川柳大会

とき 昭和五十三年九月十日（日）午前八時開場

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削 久米南町 中央公民館

兼題 風（かぜ）・種（たね）・和（わ）・指（ゆび）・友（とも）

選者 中島生々庵（大阪）大森風来子（岡山）三条東洋樹（神戸）丸山弓削平（久米南）堀口塊人（西宮）（敬称略）

席題 二題当日発表（十一時しめ切り）

投句 各題二句以内、タテ22センチ、ヨコ4センチの句せんに一句ずつ明記、裏面に雅号を書き、九月五日までに弓削川柳社宛。（出席者は当日十時三十分まで受付）

会費 出席 一、五〇〇円（記念品、発表誌、昼食呈）投句 七〇〇円（発表誌呈）

呈賞 岡山県知事賞ほか十一賞を総合成績で―以上のほか昭和五十三年六月末日しめ切りで特別課題「道」を募集中。はがきで一人一句、投句料無料。選者は上共選（無記名）とし、第一席には賞として川柳の小径に句碑を建立―

（河村日満会長）

▼川柳はこだて五月号に「普天句集」が泉きよし氏によって紹介されている。

▽同人の動向△

▼川村好郎氏（高石市）NHKの川柳特集は大好評で、各地から激讃の便りの返事を書くだけでも相当に時間をとられ、文字どおりうれしい悲鳴を上げたとのこと。

▼山内静水氏（竹原市）から—昨年につづき全日本川柳大会に準々大賞を得ました。—よく人が来る日と思う妻の留守—静水。

▼橘高薫風氏（豊中市）は今年も選者として各地から引っぱりだこで大忙がしの筆頭だった。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）から—私が指導している児島・王子のライオンズから購読者を徐々に送りこみますと。

▼斎藤通風氏（倉敷市）は恵二朗氏と密接なる連絡をとり15名ほどの購読者をお世話くださるとのこと。

▼尼縁之助氏（出雲市）から寄せ書き拝受。木次観桜川柳大会—水客、紫香氏や山陰同人の雅号がざっしり。

▼高橋操子さん（岸和田市）から—寝たり起きたりのなかから、日曜日には武助さんに運転を頼んで方々へ連れてもらっています。新しい同人を推薦をしてもみな主婦ですので長つづきがしません。

▼川柳東大阪の新陣容は、会長に桑原喜風、副会長に斎藤三十四、片岡湖風、会計に中空良京、会計監査に竹中綾女、顧問に落合恩月諸氏が決定。

▼清水一保氏（鳥取県）から—九月下旬か十月上旬に恒例の山陰川柳大会を開催します。

▼大矢十郎氏作＝押さば押せ引くなはたくな玉ノ富士＝前号大相撲特集の句が五月場所千秋楽に紹介された

▼藤井明朗氏（島根県）が発行人である「むらくも」四月号は堂々33ページの〝観桜大会作品集〟として光彩を放つ。

▼加藤貞山氏（鳥取市）から—うみなり川柳会十五周年記念・私の喜寿と共に盛会にしていただき、生涯の思い出として厚くお礼申しあげます。

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）から—第一回鳥取県川柳大会の第一位は清水一保氏が獲得。その他八木千代さん、両川洋々氏など同人の上位入賞が目立ちましたと。

▼堀江正朗・芳子さん（島根県）から—四月八日に二人めの孫（女児）を得ましたと。

▼大江秋月氏（兵庫県）から—四月十日に長男の幹雄が結婚しました。来賓に福田総理の秘書藤原三郎氏ほか多数の祝福を受け九州へ新婚旅行に—花嫁の花束涙で妻は受け—秋月

▽旅信△

▼川村好郎氏（高石市）から4月21日にNHKの収録をすませ22日に鳥取に来ています。鳥取柳人の招待で砂丘・松島の島めぐりなどを見物、23日は大会です。

▽6月の句会△

▼菜の花川柳会は10日夕六時から西郷会館（八尾神社内）近鉄大阪線八尾下車南すぐ。会費三百円。題—髪・臍・骨・筋—席題二題・各題五句以内。投句料郵券百円、締切当日到着分限り。投句先〒581八尾市高安町北一の二五、大路美幸あて。

▼南海川柳会は15日午後六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題—交通ルール・食い違い・弱気。

▼南大阪川柳会は20日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題—実益・常識・こなす・ベランダ。

▼東大阪川柳会は24日午後六時から東大阪市中央公民館二階集会室で開催。題—水車・若造り・雨だれ・ストップ。席題二題当日発表☆原稿は月末到着までですから、よろしく。

新同人紹介

納　糸葉（史葉改め）
—栞・鬼遊・酔々・推薦

森　寿風
—水客・紅月・客遊子・推薦

清野　こう

島崎　冨志子
—操子・武助・一三夫・推薦

大矢　喜一
—大輪・太茂津・柳志・一三夫・推薦

本社五月句会

会場　金属会館

八日　午後六時

久しぶりの潮花氏のご出席、遠来田中好啓氏、室田千尋氏、宇佐美和子さんほかの友情ご出席で73名は平均点である。

田中好啓氏に席題「素人」の選をおねがいした。これが披講であるという明快、名調ぶりはよきお手本である。とは句会終了後、五月句会の選者評だった。

野村太茂津氏の柳話は〝色彩学〟という、話がやや固くなるので刷り物を会場へ回わしての熱弁だった。

①物理的色彩学（光学）②化学的色彩学③生理的④心理的……

たとえば〝白〟は、歓喜、明快、潔白、純真、神聖、素朴、清楚、清浄だそうであるが一白を使った川柳を十数句ならべ、全然白のもつ意味と離れた句があるけれど、作者は白の色はなんであるかを知っていての作品か、どうか、ときびしい。

短時間なので、もっと時間がほしかった。この統篇を聴きたいという声もあったほどである。

今月の月間賞は川村好郎氏だった。やっと八尾勢にストップをかけられた。

（受付―児島与呂志・玉置重人）

（進行―西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―与呂志・重人・紫香・潮花・雅風・与史・滋雀・勝美・川狂子・蘭・水客・古方・邦晴・右近・誓二・恵美子・雀踊子・万里・太茂津・花梢・千寿子・幸・綾女・萬的・千尋・美和子・英子・武雄・百酒・好啓・一三夫・薫風・好一・美代・生々庵・瓢太・恒明・庸佑・三十四・みずほ・としよ・酔升・美幸・多久志・柳志・俊子・吸江・度・文秋・君子・智子・好郎・静歩・涼一・形水・一二三・思月・喜風・柳宏子・栞・鎮彦・あいき・岳人・鬼遊・洋敏・弥生・小松園・〆女・凡九郎・宇宙太・酔々・敏・葉子。

席題「労働」　　**若宮　武雄選**

労働歌むずかしいこと考えず　千尋
労働に疲れ家でもまた疲れ　吸江
労働の喜び腹が減ってくる　一二三
労働の汗に尊い重さ知る　好一
労働の喜び悟る無職の日　としよ
働ける喜び流転にふり向かず　滋雀
働いて母は飾らぬ美しさ　与史
労働で稼いだ金に知る重み　好一
労働で得た金じっとして居らず　右近
働いてかえす涙をもう忘れ　恵美子
軍手と言う言葉生きてる父の歌　美代
労働を金の卵は甘く見る　恒明
労働に耐える汗ふく健康美　としよ
観て食うてとんぼり働くとこでなし　与史
労働の意欲くもらす黒い霧　好郎
労働の尊さ説いてる資本主義　勝美
父の汗と関係がない労働歌　恒明
働いて得た一円玉にある重み　蘭
残業を了えて静かに虫を聞く　与史
労働へ胸の釦が熱をもち　雀踊子
神経質な労働者が株を持っている　重人
ネクタイが太くて労働歌歌えない　岳人
合唱に入れぬ本当の労働者　千寿子
労働に大空があり水があり　栞
晩鐘に祈る夫婦にひかる汗　酔々
働ける倖せ七十の作業服　思月
労働条件はなし七人家族です　栞
老骨に鞭打ち働く物価高　誓二
メーデーも不況に湿める労働歌　柳宏子
終電車働きすぎの顔顔顔　英子
賃上げのスト労働の汗が無い　与呂志
労働歌も知らずに稼ぐ小商人　好郎
労働の大きな軍手干してある　雀踊子
労働の汗へ素直な風があり　水客
労働の歌五月の蟻は歌わない　岳人
明日の糧ある労働歌なら歌わない　雀踊子
労働の汗に輝いてる自信　幸
地下足袋がアア極楽と言う日蔭　武雄

席題「素人」　　**田中好啓選**

素人の眼が真実をはなさない　凡九郎
お素人さんどすかとは失礼な　薫風
素人の方が上手な電気鋸　重人
素人はがんじがらめに荷をくくり　紫香
素人の甘えに一言が突きささる　英子
フラッシュに素人の汗が美しい　美代

下手な絵に立派な理屈つけている　与史
素人にみせたうぶさで客に持て　一二三
素人の振る赤旗は信じとく　英子
素人芸ボロの出るまでやってみせ　柳宏子
嬉しがらせ素人さんには見えません　生々庵
素人の強引ぶりに負けておく　百酒
素人の悲しさ奥がはかりかね　好一
ブラックを飲むと素人らしくない　美幸
素人療法母は信じてやつれてる　君子
素人の子役でプロを食っている　洋敏
素人の目にも建て売り弱々し　文秋
素人は正直歪んだリンゴ描く　与史
素人にこわれるものがなく踊る　千尋
素人が描けばおもしろくないカボチャ　幸
素人の釘素人の音で打ち　潮花
玄人を真似る足元から剝げる　英子
素人の棚はそのうち落ちるだろ　鬼遊
素人の作った棚に乗る寓話　智子
主役はあんたと素人の顔を立て　水客
座り直して素人らしい口はさむ　萬的
素人としての生きざま見て貰う　水客
素人は足し算ばかり考える　美幸
素人だと思うしっぽを見てしまう　君子
素人の目にUFOが見えてくる　酔々
柿若葉もう素人でない轆轤　栞
帯しめの素人らしいとこがいい　千尋
素人が鈴ふる神が降りてくる　酔々
素人には売らぬ般若の面一つ　岳人
味噌汁の味噌を素人聞きたがる　好啓

兼題「平気」　**阿万**

下の世話平気で居れぬ程にいえ　柳信

万的選

後指平気で受ける手のダイヤ　優
煙草の輪フワリ平気で嘘をつく　登美也
税務署が来ても平気な赤字です　公平
平気ですあなたの癖はおこり癖　枯梢
誘惑は平気私に真実がある　維久子
平気装う喪服の背が泣いている　どんたく
メロドラマ寡婦は平気で見ておれず　文平
五十には五十の夢がある平気　〆女
平気で遅刻平気で上座占めるボス　静馬
弱りきってるさかい平気なんやろか　古方
税務署へ平気な顔で妻出かけ　勝美
母子手帖平気な顔で出す未婚　英子
癌と知らぬ本人平気な手術台　右近
平気な顔して医者は手を洗い　吸江
世間知らずだから平気で通り抜け　あいき
混浴を平気で和む田の休み　栞
あっさりと堕して平気な顔で出る　涼一

平気ではおれず胃カメラ呑みにゆく　好啓
サラ金を平気でくぐるかおを持ち　柳志
矛盾の世を平気で渡る馬鹿でいる　武雄
時事放談憎まれ口も平気で出　三十四
人前で平気乳房をふくませる　思月
噂の中を平気で金魚になっている　君子
平気そうな顔で敗者は酔うている　好一
はったりも平気代議士板につき　一二三
何もかも平気に馴れて彩がない　美代
疳高いおしゃべり平気な赤電話　生々庵
福田さん平気を装う日の長さ　一三夫
事さらに平気よそおう眼鏡拭く　美代
貧乏も平気私に詩がある　与史
こんなとき平気でおれる傷を持つ　水客
音痴同士だから平気で今日も酔い　生々庵
平気をよそおう裾のみだれを見抜かれる花梢
妻の座へどっかり平気で嘘も言い　多久志

一分間の柳論

安平次　弘道

私は地元の駐在所のお巡さんが発行している「駐在所だより」に、川柳を載せて貰っている。「駐在所だより」は堅苦しい記事になりがちなため川柳をとのことであった。だから誰にでも判る句、しかもユーモアーのある句をと心掛けている。従って地元の皆さんからも好評を得、特に身近な句やユーモアのある句は喜ばれ、川柳をやってみようかと云う方もあらわれている。

最近、詩川柳とか革新川柳とか云って理解に苦しむような句をみかけるが、川柳は一部の人が理解できれば良いと云うものではない。川柳は庶民の中から生れ庶民の中で育った庶民のための文芸である。従って広く一般の方々にも理解できる句こそが立派な川柳であり、川柳の輪を拡げることにもなるのではなかろうか。

もう一度川柳の原点にかえって誰にも判って頂ける句を作るよう、お互に心掛けようではありませんか。

足組みかえて平気をよそう眼をつむる　萬的

兼題「空」　**児島与呂志選**

大空の彼方に消えた伝書鳩　登美也
領空を越えねばならぬ鳩になる　宇宙太
竹トンボここは子供の青い空　邦晴
人間のおごりへ空が荒れてくる　度
雲動き空の広さを悟らせる　弥生
大空に傷心休める刻がある　鬼遊
地の塩に美しきもの空の青　一二三
嫁ぐ娘へ母真夜中の星を読む　柳宏子
満ち足りた生活は空の碧さ知る　柳宏子
夕焼の空悔なき日を感謝　雀踊子
御無沙汰の故郷へつづく空がある　与史
歩いても歩いても空に追いつけず　酔々
お隣りの空のつづきが僕の家　千尋
寝た切りの手帖に空が描いてある　としよ
大空へ恥じぬ心のネジを巻く　水客
メガホンで怒鳴って空に笑われる　柳志
極点の空秒針を止めて見る　維久子
人生飛行青空ばかりと限らない　敏
大空から見ると人間ちゃちなもの　喜代美
背信のどこまでつづく曇り空　どんたく
曙の空はドラマのファンファーレ　あいき
上を向いて御覧大きな空がある　涼一
善人の柩か空は晴れわたる　蘭
星空へ平和な我家の灯がともり　雀踊子
よく晴れた空へ背伸びしたくなる　潮花
行くとこもない日の空が晴れている　柳志
青い空あほらしなった座り込み　好啓
象のみる空はいつでも砂が舞い　弘生
空不変雲に怒りの貌もみる　右近
縊りたい空余りにも広すぎる　邦晴
富士山に立っても空のまだ高く　惠美子
日の丸が一番映える空の青　凡九郎
天仰ぐ男に明日の視野がある　文平
道草は空の青さへ続く道　涼一
盲人が空を見上げるのど仏　宇宙太
少年の画布に輝く空がある　与呂志
孫やっと男の空に鯉を上げ

兼題「包む」（牧人氏の代選）　**若柳潮花選**

包み込む愛へ反発だけ返えり　柳信
節くれの手で包まれているぬくさ　美代
夫が居るその安らぎに包まれる　あいき
嬉しさを包み切れずにふれあるき　酔升
椅子浅く小さな意見包みこむ　太茂津
入れ知恵に包まれたような座りよう　水客
包み切れぬ歓びというのにまだ逢わぬ　与史
ぶきっちょが包むギョーザはパンクする　敏
失意の日顔も包んで歩きたい　千寿子
人間の皮で包んだ女豹の目　生々庵
額の裸婦乳房を包むものかなし　智子
海峡のドラマは霧に包まれる　美幸
包むもの包み相手の出方待つ　一三夫
行きずりの善意が包んである無名　滋雀
慰謝料がないから何もかも包む　好啓
何もかも包まず場末の街に住み　萬的
玄関で待たせ何かを包む音　紫香
普段着で包む身体はほっとする　鎮彦
包み金渡すチャンスを見失なう　花梢
包まれた善意の中で独り拗ね　柳宏子
多過ぎるかと包みながらまだ迷い　庸佑
マヒの子を包むクラスの眼が温い　三十四

川柳塔誌・兼・席題課題表

（一路集）

（創刊号～52年11月号）

片道・傾く・花壇・型破り・活字・活動・カップル・鐘・かぶりつき・壁・かばちゃ・紙・紙くず・過密・雷・カメラ・仮面・からっぽ・ガラス・カレンダー・借り着・軽い・かるた・カロリー・川・寒波・寒行・看護婦・看板・幹事・幹部・乾杯・環境・感化・貫録・観光・甘言・間食・顔色・勧誘・眼帯・感謝

「キ」

気合い・消える・記憶力・聞き込み・菊・奇術・帰省・北・ギター・吉日・切手・吉報・気まぐれ・肝っ玉・キャリア・逆境・逆風・救急車・求人難・急所・虚勢・巨星・ギョーザ・キリスト・切り札・義理・金婚・金魚・金策・金メダル・勤労・筋肉・禁煙・銀行

「ク」

クイズ・食い違い・空気・空腹・釘・草・草分け・串・薬・口止め・口・口先・くく・くつ下・靴音・靴ベラ・崩れる・グッドバイ・首・窪み・雲・雲の峰・クリスマス・栗・グリーン車・車・グループ・黒・勲章・群衆

「ケ」

ゲーム・警官・警察・警察犬・経験・計算機・敬老・芸術・劇画・激突・消印・景色・ゲスト・ケチ

（この項未完）

―**樫谷寿馬**

汽車賃を包む水臭いと思う　好啓
有刺鉄線心に包んでいる女　吸江
平等に包み込めない落ちこぼれ　みずほ
黒い霧包む疑惑の紐が解け　喜風
菓子折りの包みも秘書に受け取らせ　洋敏
包まずに話してからの縁になり　英子
なけなしの日銭包んでくれた母　思月
金包む手許を男見ていない　水客
板前を褒めて残りを包ませる　多久志
当選を祝うて送るこも包み　潮花

兼題「箸」　**正本　水客選**

支払いは役所がします箸枕　登美也
据え膳へ箸割ってからまだ迷い　弘生
箸紙で地元の唄をまず聞かせ　公平
箸にも棒にもかからないのが社のホープ　静馬
青い目の器用な箸にふと見とれ　思月
箸紙の名前の席につく祝　綾女
褒めたほど箸つけてないお手料理　一二三
人の世に敗れつづけた父の箸　美幸
倦怠期僕の弁当に箸が無い　あいき
割箸の先ではねてる生造り　潮花
夫婦箸一人で食べることになれ　形水
夫婦箸揃え妻にはなれぬ人　洋敏
いつからか娘が亡き妻の箸使う　右近
折れそうで折れずに夫婦箸がある　好啓
箸紙の旅を蒐めたスクラップ　滋雀
末席で面白くない箸動く　恒明
左利きの箸で器へかがみ込み　恵美子
箸枕元来我が家平和主義　小松園
挨拶が長くてあちこち箸を割り　としよ
普茶料理竹箸青いままでよし　紫香
もの思い箸に心をさぐられる　美代
企みの酒へ裏かく箸を割り　好郎
夫婦箸色の褪せたを口にせず　小松園
割箸の先へはさんだトオガラシ　潮花
赤い箸使っているうち娘の平和　与史
金婚の夫婦静かな箸を置く　万里
重い日も軽い日もある夫婦箸　誓二
いつ頃からか甘酒の箸一本　文秋
箸持てばまた客が来る小商売　酔升
箸つけてお次へ回わす活け作り　萬的
杉箸の柾目も老舗の京銘菓　右近
食べ初めの子に父の箸母の箸　雀踊子
あま酒の箸へ寒さがとけてくる　美幸
一膳の箸が重たい負けいくさ　重人
夫婦箸だんだんまるくなりました　千尋
箸箱にただ何んとなく添いとげし　思月
気に入らぬ相手で箸がぎこちない　紫香
お代わりをする朝粥にぬれる箸　太茂津
ベトナムをしきりに思う竹の箸　美代
哀しみを超えると箸がせわしない　好郎
まだ箸を執ろうとしない横車　水客
独り旅箸置に箸がある

（河井庸佑・整理）

▼八月七日（月）は本社句会です。
▼八月二十七日（日）は大坂形水氏の古稀祝賀・句集「谷町」刊行記念句会です。

雅号ぶっちゃけばなし（169）

せんざん

こたに

山仙谷小

私は山好きで何んとなく付けた雅号です。仙山は仙人の住む深い山と言う意味です。玉野は昔から禿げ山で県下に不名高い市でした。そんな所に生れ育った私には仙人の住みそうな山の憧れです。後になって玉野に大仙山（だいせんやま）の有る事がわかり其の後は大仙山の大を取り下二字を借用した事にして居ります。この山は玉野の中央に有り、備讃の瀬戸の島々を眼下に遠くは高松源平古戦場で名高い屋島は晴日なれば手に取るように眺める事が出来ます。仙人の住むような山では有りませんが私には懐かしい名付け親にしたい。私に川柳の有る限り捨る事は無く雅号と共に苦労する事でしょし、宜しく御願いします。

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

菜の花句会

高杉鬼遊報

キッチンで女踊らす好きな人　弥生
パンタロン中身の肉はわからない　万里
父方の陽気をついだ踊り好き　史葉
社の食堂カレーの肉が見当らず　みずほ
元通りの形で家裁の門を出る　宇宙太
肉眼が冴えて月夜の神を見る　酔々
浜へ出て石投げてみる負けいくさ　美幸
親だけが肉を食べてるように見え　昭子
よい柄を姉にとられた形見分け　誓二
寡婦踊る何かむなしい色である　紀美代
遠足の鈴追いついた音で来る　栞
海の幸よりも原油が浜に寄せ　白愚
踊りからはなれバイトは札数え　鶴声
浜焼きの鯛も冷凍魚を使い　綾女
シルエット好きな人ならすぐわかる　鬼遊
遠足のつくしが夕餉の膳にのる　サヨ
本尊のうしろでこっそり肉を食い　度
急に水澄んでボーフラ踊れない　君子
ネクタイの手前ロースの見栄を張り　雅風
焼跡の金庫に望みかけている　勝美

建水分神社さくら句会

阿部柳太選

桜の花忠魂塔へ散りかかり　雀踊子
三分咲き特級酒でまだ酔わず　岳人
飲む人にあやかりたいも桜かな　寿馬
妻よ子よせめて夜桜くらいなら　鬼遊
五分咲きでも酒があり肉がある　牧人
桜には早き峠の鍋の味　小松園
石仏に有縁無縁桜散る　酔々
したたかに酔うて寝てよし花の下　栞
お煎茶が出る桜見は女連れ　柳太

オーエスケー川柳会

大坂形水報

光とは無縁こころに灯を点す　聖地
親の目が娘に光る適齢期　みどり
付合って光る度合を計ってる　一扇
小巾でもジャンプをねらうつもりなり　実
退職に未知の世界へ飛びこんで　栄
目の前を一気に飛べぬ壁がある　一念
出勤の会社があってありがたい　亜也子
出勤の朝の五分にあるゆとり　野生
出勤へ妻の笑顔が今日も有る　博泉
出勤にやる気いや気が乗り合せ　秀川
一歩でて出勤の顔に変ってる　有一
ふと見れば大阪の空に星光る　千夢
見送りの窓ごしの目に光るもの　常夢
屋根よりは高く飛べない寺の鳩　形水
光線に秘仏恥じらうシャッター切る　入仙
共稼ぎ同じ権利の朝を出る　好郎

どんぐり川柳会

谷垣史好報

どうしても憎み切れないねずみの子　美幸
物好きな男が喰べる鹿せんべ　岳人
物好きと言われてもよし恋女房　瓢太
抵抗もなくかつがれている柩　酔々
白ねずみと云われ支配人で終り　好郎
薄笑いして捕われるヘルメット　恵美子
倒産の会社で鼠だけが肥え　小松園
屋根裏で鼠がきいている汚職　憲祐
その先を言うから抵抗したくなる　サヨ
中流を意識しだしたどぶ鼠　薫風
公金をつまむねずみに策がない　真砂
ものの好きをいたわる水を用意する　弥生
台帳を嚙ると思えぬ白ねずみ　生長
抵抗の詩ともとれる労働歌　修史
骨のある奴と抵抗認められ　吐来
宮仕え背広が貝になっている　勝美
不幸者幸福行の切符買う　鬼遊
倒れても鼠へ仏の声がない　雅風
ささやかな抵抗お菜の彩に見え　喜風
抵抗がすすり泣きする襖越し　痴亭

川柳ささやま

河原みのる報

受験日の溜息拾ってくれた母　秀峰
腫れものが一人試験日待つ我が家　珠玉
試験には全敗をした父の過去　ひか平
出来過ぎた息子は赤軍に立て篭り　白峰
倖は出来過ぎという子供持ち　無鬼
東大を楽々パスもせいがなし　みのる
出来過ぎが一人いるから座が白け　文平
水茎のあとが合わないプロフィル　可住
プロフィル夢二の知らぬ世界です　百合子
煩悩を断ち切る尼僧のプロフィル　千代子
してやった微笑かくせぬプロフィル　越山
プロフィル社長の深川糸に合い　近江
失業がおしえてくれた夫婦愛　とも子

失業をまぎらかすよに花作り　靖子
失業へ明るい妻がたくましい　喜美代

川柳わかやま　津田与史報

慌てても翼にひなを抱いて伏せ　千代
母かばう話しへ誰も逆らわぬ　雀踊子
直っすぐに歩いて蟹が反旗振る　幸
客足が途切れて喧嘩やりなおす　太茂津
雪国の情の色で蟹届く　武雄
啄木のロマンを拾う蟹がない　きみ
食べて貰うための身がある蟹の爪　十郎
食膳に王者のようにすわる蟹　祥月
越前の蟹の甘さや旅の宿　安代
女同志話のつぎ穂を撰る焦り　和子
補聴器へ心一ぱい話す嫁　としよ
興奮の拳慌ててやりばなく　登紀夫
客席にあの人もいる初舞台　白光子
先客の手土産横目にかしこまる　光代
失言に気付き慌てて言葉撰る　佐知子
お客には見せない素顔のママが好き　裕美
女学生親をドッキリさす悩み　富子
里帰りもう客扱いにされている　寿子
珍客をまだ起すまい春の雨　与呂志
赤い灯が客の財布へ媚を売る　信秋

川柳たけはら　森井菁居報

伝票を取り合うほどの額でなし　静水
日々好日なにやら芽ぶく春の庭　房子
寒い日にはホワイトコート着てみたく　千代美
足ぶみのまま足ぶみも止まりそう　文晴
凍るもの凍てり金魚の朱の温し　鈍舟
戦えばまた横転の車椅子　こうじ
節分の鬼は食べてばかりいる　笑子

立春や春の言葉もまちまちに　紫光
凶もよし吉もまたよし血が駆ける　洋之祐
日曜をわたわたと主婦終る　そのみ
つくろった助言いささかもの足らず　敬子
雑草の生きるすきまがあけてあり　政己
転んでも転んでも鬼起きてくる　蘭幸
パカパカと田舎道ゆく駄馬でよし　節夫
豆の木へジャックみたいにのぼりたい　小二のり
検定日がんばりましようマイペース　小五愛
父よりも倍生き悟れぬ人生観　松緑
作戦の一つ白旗をふろうかな　一路
因習のひときわ光る鍋の艶　不朽
チャップリンが消えたピエロの面つけて　英詩
敗北を認め二合の酒に酔う　菁居

倉吉打吹川柳会　奥谷弘朗報

一べつにちらり心の底が見え　陳者
あの雨が雪に変った山の宿　舎人
うぬぼれがあって人生また楽し　節枝
恍惚になるまい六十路の身嗜み　満春
手間暇はいらず笑顔で迎えよう　典女
馬の子のように夫と四十年　嘉子
耳よりな話に乗れぬ異がある　碧水
ため息が出ても晴着を買いたがり　香雲
人生の幾坂越えて木の葉髪　寿満湖
孫が来て貧しい心うめてくれ　千重子
梯子酒その無駄やっと朝解り　勇峰
身のちぢむ思いで合格電話待つ　きくの
人間味溢れる裁きに出る涙　蒼水
正論の肌に感じる人間味　夕路
亡妻にひと目見せたい娘の晴れ着　弘朗
飼い主の言葉を馬が聞きわける　布堂

馬子三吉親子のきずな袖が濡れ　静子
馬面を生かして食うも芸の内　柳風
馬面の差でかがやく五月賞　御前

岸和田川柳会　植山武助報

退院日告げる主治医の笑い顔　裕子
あの人が来ると笑いがまき起り　佳生
コマーシャルあとの笑いで呼びかける　芳子
笑う日を信じて耐えて行く苦労　こう
久し振りに笑って春の寄席を出る　世界人
里帰りしてもせずとも老母愚痴　みずほ
世話好きのくせ愚痴っぽいお人好し　春栄
昔の事思い出すからつい愚痴る　武助
父の愚痴きいて我が家は睦じく　加仙
目的の違う世界で言いそびれ　辰雄
目的地着いた途端に腹が減り　民治郎
日記帳愚痴と幸せ雑居する　富志子

佳句地10選（前月号から）

川竹松風選

惜まれて散る花でよし人生譜　多賀子
頂点は男一人が立つ広さ　史好
金ほどに阿弥陀如来は光らない　紀川
高砂にのり掌中の珠が消え　秋月
満二十才きのうと違う酒の味　弘生
青春の鏡きのうを映さない　武雄
自惚れて女らしさを捨てた顔　寿朗
弱虫な男となって故郷を恋う　鬼焼
一徹を貫き貧しさ口にせぬ　美幸
土鈴一つ才女の部屋にかしこまり　栞

日を拝む事を忘れた日のおごり　操　子

川柳しんぐう　川上大輪報

謎のある女ナンバーワンで居る　千寿子
古代史の謎へ学者の土いじり　大　輪
人生の暮色へ謎が解けてくる　寿　子
謎明かし兎が住めぬ月にする　弘　生
謎に謎重ねてドラマもり上り　としよ
謎めいた誘いに重い自動ドア　幸
瓜磨きながら女は謎が好き　富　子
焼香へひっそりと立つ謎のひと　〆　女
裏切った親から届く初節句　与呂志
名を消した善意が届く十二月　雀踊子
手の届く位置にいてほし飛んでほし　英　子
一日の汗へ寸志が届けられ　十　郎
春の幸届ける風の肌ざわり　武　雄
泡立てる不満のカニの横歩き　公　治
横道にそれて行く程勇気なし　佳加志
通学路横に這うまい蟻の列　里　美
横向きの会話が続き揉めている　とよ子
入試の子かかえ親子で寝不足し　まさ子
神奇跡信じて入試の席につき　渓　水
横車押せば孤独がついてくる　与　史

川柳後楽　井上柳五郎報

唇を染めて険しい女坂　桂　風
唇を噛んだ無念が拳振る　恒　洋
掌の甲で唇を拭くコップ酒　胡　風
唇の距離が理性を遠ざける　たけ志
唇を舐め二次会へついて行き　秋　月
外出着電話で見せたい話好き　ひろし
果しなく続く親娘の長電話　哲　郎
話好きドラマは嘘を積み重ね　廉　博

話好き政治を手玉にして語る　友
割り込んで主役に収まる話好き　草　風
未亡人居士を背負うて四国路へ　元　一
未亡人父親代りのままで老け　幽　谷
未亡人噂の種をまたまかれ　久米雄
仏壇を閉め三面鏡の未亡人　佐加恵
合格の知らせ禁酒またのばし　宏　大
合格の祈願は親に委しとき　昌　吾
合格の新聞各社を買い集め　照　路
合格に母の白髪が又も増え　梁　太
回転の早いテンポで話好き　柳五郎

西宮北口句会　小浜牧人報

美しい蝶は新芽にむせて死ぬ　伊　升
厄除けと思って寄付をはずんどき　喜　甲
手さぐりで始めた趣味に夢をもつ　喜　世
踊りの輪抜けて一人の月を見る　喜久甫
奉賀帳顔立ててくれと拝まれる　ろ　山
引退の踊りへ惜しみない拍手　八　州
寄付金の工面をパスした子は知らず　笑　女
木々芽吹き嫁ぐ心のなおおどる　摩耶子
平社員裸踊りで名を知られ　静　馬
踊り子の肌がわびしい楽屋の灯　〆　女
梅一輪一輪ずつに試歩が延び　半　歩
ホームラン新芽を踏んで草野球　正　祐
追憶の瞼に亡き子が踊りくる　総　甫
木々の芽のささやきを聞く雑木林　牧　人
郷土への寄付には見栄もふくまれる　とし女
パトロンが出来て芽が出る芸の味　千世子
打ち明けて胸の重さが溶けてゆく　婦美子
番号も小踊りしてる合格日　寿　馬

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

自転車も乗せた渡し場ダムになり　摩天郎
自転車が駅前らしくしてくれる　圭　水
自転車でよその芝生を斜に抜け　小松園
六十年馴染んで自転車離せない　与　一
自転車へ乗るなと妻は齢を云い　勝　美
今日生きるペタルを妻に見送られ　清　女
自転車も近所の見栄となる団地　昌　水
停年後通勤自転車案じられ　雅　風
駅までは自転車がいるマイホーム　宏　子
自転車を降りてやっぱり立ち話　柳　信
自転車で駅まで通う共稼ぎ　誓　二
自転車操業例外でない我が家　恒　明
自転車に跨がりながら出すハガキ　正　和
自信過剰自転車怪我をかくす老　ミツエ
長話ママの自転車動かない　維久子
人生の喜劇主演は君と僕　千万子
喜劇人顔からすでにして喜劇　東　雲

川柳化粧櫓　植村客遊子報

寒椿咲く庭目白知っている　紅　月
圧力へ無言の抗議投書欄　秋　月
人前で叱れないから茶にさそい　岳　詩
新調の背広だ胸を張り出社　葉　香
唇の紅さにほれてもう五十　奮　水
占いを信じ逆境の愛芽生え　実　男
補欠選同情票を集めかけ　越　山
手を引かれしょんぼり歩く寺の道　永　楽
酒によし団子にもよし桜花　客遊子

川柳塔まつえ　恒松町紅報

一矢身に受けた記憶はまだ癒えず　雅　逸
青春の記憶ベールを着せたがり　千　代
大盃で大安閉じる四海波　みのる

大盃で同期の桜すでに酔い　虎秋
ご都合で記憶あったりなかったり　愚童
コレクションの盃で来客もてなされ　鶴丸
老妻の盃助ける目出度い日　新雪
子の事に触れると自白ほのめかす　舞吉
いまわしい記憶みぞおちが痛い　登美也
盃の底に一票見え隠れ　巡歩
花びらと黄砂のコントラスト春　週児
今日の佳き日へ花びらは欠けてない　孤呂二
出世したかの様に海外から戻り　町紅

川柳東大阪　竹中綾女報

ほとぼりを合せ鏡にうつし出す　鎮彦
ほとぼりのさめた頃だと借りにくる　思月
飾らない女にあった真実味　美幸
雑草の名もない花でいい飾り　古方
飾られた祭壇眺めただ涙　綾女
飾られても馬に優勝感はない　雅風
耳飾り女の虚栄がゆれている　好一
ネオン街女虚飾の影を持ち　喜風
飾り気はないが心の温い人　恒明
錦着て帰れど腰がもう曲り　一舟
おしゃれしてアランドロンに近づけず　柳信
母さんのおしゃれはいつもイミテーション　度
母さんのおしゃれクリームの匂いする　三十四
退社ベルがぜんハッスルする男　美子
ハッスルの末は二次会三次会　弥山人
眠る獅子ハッスルしだす退社ベル　幸生
ハッスルをしたが資金がついて来ず　静歩
底辺を明るく生きて行く希望　文秋
七転びしても希望の灯は消さず　誓二
希望あり青年明日の地図を買う　牧人

南大阪川柳会　中川滋雀報

純粋な心にさせる冬の月　智子
二人だけ知る純粋を信じ合い　喜風
純粋を濁り世だから追い求め　頂留子
出来心串を一本落してる　勝美
出来心にしてはこみすぎてる手口　庸佑
出来心野心のベルを押してみる　涼一
広野ひらく長いトンネルだった旅　好郎
トンネルの壁に模索が描いてある　滋雀
トンネルに賭けた命を碑に刻む　酔々
撫でる方もつろうけれどまだ死ねず　一舟
つらいとは言えぬ立場で耐えている　好一
聴えない辛さ夫の愛で埋め　久子
道化師の笑顔よつらい日もあろう　美幸
脚線美に自信ブーツは履かないの　誓二
ブーツ履くと夫のいない顔をする　憲祐
赤いブーツで狼なんかこわくない　君子
頼まれもせぬ世話をやき気が疲れ　文秋
気疲れを知らぬ若さに気が疲れ　あいき
気疲れを見せてはならぬ座に直り　小松園
借り物の帯に気疲れためている　度

京都塔の会　松川杜的報

深か深かと頭下げてる方がお師匠はん　杜的
米をとぐ手に核家族ふと思う　芳子
もう出てもいいかと杉の子風に問う　紫香
息子待つ無言の父は風呂を焚く　美穂
新幹線今日はどんな理由で止まるやら　求芳
孫の守り一つ時鳩にみてもらい　佳似子
除雪車が並んでおって雪晴れる　笛珠
パンの耳残す女に親しめず　水客
戸惑いをする程親しく口きかれ　弘之
花に寝る蝶を子供が戸惑わせ　潮花
ゼスチャーと云う戸惑いが客にうけ　白渓子
腕相撲子へ手加減もせずに負け　飛鳥
送別の主役で二の膳手につかず　和友
節分の豆をかくまう綿ぼこり　三求
五色豆好きな色からつまむ指　誠史

城北川柳会　川口弘生報

目標がおいでおいでと遠ざかる　右近
子育てを離れて子守りに気が疲れ　弘生
こどもから大人へ移る部屋の鍵　満津子
こども軸として平和な城がある　道子
クレオンの先にこどもの国がある　喜代子
こども服可愛いい孫の顔だぶる　千子
片言の声にかわった子の電話　敬
恐ろしいこども新聞種になる　ふみ
妹がほしい子供の夢がかなえられ　行有
子供部屋造って入れぬ親となる　ますえ
休日のパパにとられた凧の糸　はるえ
かわいい子殺す心も親ごころ　秀村
中学生の非行に元服を考える　一休
中山寺やっぱり授りものである　きくみ
幼な子と滑れば滑り台きしみ　人美
咳込んだこどもへ隣が席を空け　テルミ
閼米を粉にして戦時の柏餅　恒治
菱餅のお礼は届く柏餅　寿馬
柏餅ナイロン皮で味気ない　炉斉
柏餅布団三浪の徹夜譜　三十四

いずも川柳会　高見鐘堂報

階段の上で停年待っていた　孝太郎
春を盛る皿にいちごの色におう　虎秋
小走りに階段昇るいい話　華村

あなたの
川柳句集を！
お気軽にご相談ください。
印刷全般　藤原童心社
〒564 吹田市天道町6番15号
でんわ(06)三八八—二三七七番

階段を昇って裸婦につきあたり　多賀子
全力投球受けとめてくれる妻がいる　鶴丸
福笑い天下泰平頬のしわ　正江
繁栄の裏でがめつく鞭が鳴る　露幹
泣くまいとこらえる頬が濡れてゆく　秀子
全力の顔へ雑念消えており　九二老
出し切った尊い汗のさわやかさ　軒太楼
小胆な奴がめつく貯めている　みのる
妻いとし産む全力のあぶら汗　独仙
階段へ出合いがしらの立話　紅葉
皿盛りの残りへ席を変えて呑み　草丘
全力をしぼりテープへもつれこむ　代仕男
がめつさを罵る口で賞めている　秀雄
全力で駈けた死線の勲八等　栄
カレー皿育ち盛りの音がよし　緑之助
親ゆずり親もあきれるがめつい子　正朗

うみなり川柳会（鳥取市）　豊生報

成り上り馴れぬポーズもつくってみ　正
寝転んで宇宙の広さ知る芝生　笑王
強がりのポーズを妻に見すかされ　雄人
春一番芝生の上をなでてゆく　とみ枝
口ぐせに姑は明治を恋しがり　吟月
驚いていられず焦げた始末する　美智子
商売ともう割り切っているポーズ　雄々
妻のぐち亡母に似てまた老いを知り　華子
驚いた証拠におんなはよく喋り　昌三
野点で一服芝生に心落ちつかせ　富美湖
口ぐせの注意が無事故ささえてる　葉士人
ポーズから外れて半分写される　舟宏
驚いた声のわりには目が笑い　熊生
敗戦の瞳に芝生青すぎる　無人
またたきをしたら涙が出る門出　豊生
浮世絵のポーズ妻の洗い髪　洋々
ホールインワン芝生も拍手惜しまない　貞山
口ぐせに南無を唱えて似合う齢　由多香
当選の今日言いなりになるポーズ　日満

三井ケ丘川柳会　高田博泉報

地震など気にもしてないガード下　柳宏子
不惑とは煮つまってくるおでん鍋　よしひろ
地質学よりもナマズの知る地震　鶴声
革新を信じて鍬を深く打つ　寿馬
マイホームマイカーマイホームマイピアノ　洋茶
マイホームローンが終れば銀婚式　彪
迷い子になって親の愛確かめる　弘生
片方の耳は革新に向けている　一念
微震でも日本消えそな世界地図　琴音
雨の中幼児遺し柩車去る　三郎
役立たずなって枯淡と負け惜しみ　一菁
シャボン玉に封じて失意吹っ飛ばそ　あいき
靴音も鉛抱く日と抱かぬ日と　右近
時差出勤颯爽と妻の爪光る　三千子
かまきりの鎌革新もままならず　度
顔の利くローンへ紹介たのまれる　恵美子
顔色を読む子に叱るのはやめる　亜成
停年がローンの終りになっていた　博泉
隣からローンローンとピアノ鳴る　牧人
革新の息吹きへ頑と薪で焚く　小路
国民の眼に保守革新も泥鼠　亜鈍
くくり頭仏さまにもある色気　小松園
倒産のそれからローンへ屋台曳く　美幸
紅梅の蕾莽めくく受験の日　静歩
革新に内ゲバのある哀しさよ　薫風

駒つなき句会　岸南柳報

ハンドルは奥さんが持つ酔いっぷり　宏子
ハンドルが苦悩を消して呉れぬ夜　規不風
夕映えを歩いて親と子の対話　信治
花ぐもり千鳥に歩る五条坂　善信
よちよちとあるく孫の手に血が通う　祥恵
親の道歩きたくない現代っ子　茂子
履物を気にして遅い妻の足　雅風
更生にもう間違いのない歩巾　恒明
さそわれて歩るく山道淋しすぎ　南柳
足音を殺して歩るく見舞篭　勝美
ローカル線となり気さくに話しかけ　潔
気さくさは一つふとんに寝てくれる　はやを
気さくさが妻を忙しくする厨　多津緒
家計簿を気さくが仇で揺さぶられ　悟郎
気さくさが教うふんいきだってある　鎮彦
一人旅気さくな人と乗り合わせ　育園
何処へでも気さくな父で使われる　小路
大世帯気さくな嫁で使われる　柳信
店先で遊んで気さくな子に育ち　恭太
曇りのち晴もとの気さくな娘に戻り　小松園

大田川柳会　藤田軒太楼報

歩くにも胸張り春風切る子の歩巾　長樹
歩き振り素人でない過去を持ち　雷音坊
父の辭歩く姿にまで貰らい　軒太楼
祝餅背負い誕生二歩三歩　独仙
歩で歩く金にも成らず駐在日記　煩悩児
振り向かぬ姿に母はいつまでも　雪美
帰る母見えなくなる迄姿追い　賢吉
結ばれて生きる娘の晴姿　ぬるを
母と子の愛情乳房にある姿　可保留
背姿若しや若しやと歩を早め　緑之助
女とは見えぬ姿の黒田節　祥月
釣仲間どうだと魚拓見せつける　虎秋
観光地お国自慢でピーアール　ゆう子
持っている奴が黙って聞く自慢　耕草
都合など云ってはおれず月は満ち　立雲
悪友は都合も聞かずあがり込み　みのる
神様の都合で四ツ子授けられ　九二老
この人の自慢話で座が白らけ　秀子
煽てられ自慢の鉢を持ってかれ　孝太郎

和歌山七面句会　中筋三幸報

新調の服はずかしうれし新入社　秀市
入社せし日もあり迫まる定年　勇次
入社して職場の花のまま残り　やよい
入社式社長訓話をもらさじと　晶子
入社してチヤホヤされるも二三日　周穂
遠い日の自分見ている入社式　昌三郎
下心なしと誘いの下心　宏
さりげなきことわりの文美しく　和美
本命じゃない娘も誘うハイキング　宣子
無理矢理に誘うた奴がもてている　三幸
民謡が老の孤独を救います　淳子
民謡の一つ一つにもつロマン　冨子
民謡も流し本場直送かに料理　知也
民謡は昔、昔の恋の唄　光治
おてもやんに似てる仲居で愛想よし　智水庵
民謡の里マンションの建並ぶ　隆恵

まるべに川柳会　村田瓢太報

餓死してる国があるのにダイエット　幸子
寮生にかかる電話は母の声　星斗
カラオケの何時しか歌手の気にさせる　寿子
水槽の亀の動きで知る早春　弘
インタビューマイクは美談聞きたがり　道子
迷子呼ぶマイクがお花見らしくする　武水
音が描く景色の中にわれを置く　満津子
舌先も春を奏でる木の芽あえ　好郎
満期のたびに定期の利子がまたさがり　瓢太

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

アルバムに黄色くなった祖母達者　五木
梅雨も良し我家に布団乾燥機　ひろ坊
啓蟄に二人の老の歩を合せ　実
予備校は失意の顔にビラをくれ　岩光
手放してひまの出来たとよろこべず　たか子
珍らしく星が出たよと梅雨の夜　一竿
定刻のように一番鶏が鳴き　金志郎
結婚の当時は白黒の写真貼り　畑中
苗代の畦にたじろう稲余寒　朴竜
あれも良しこれもよいなで選に洩れ　勝一
戦国の中小企業は札の弾　掬治
ほっとけぬ娘必死の口答　紫浪
ふんわりとせまる感じの春にふれ　虹汀
惜しい恋捨てて尼僧の恋かすみ　回天子

川柳高知　川竹松風選

退院も近いと安心させるうそ　十面子
鼻唄で荷造りしている退院日　広風
退院と云えども今だに松葉杖　芽十
母の背に寝る幸せの高鼾　暁耕
学のない母に世渡り教えられ　蟠蛇
愛称で呼ばれる母の五十坂　麗子
ママ母の死角で遊ぶ子に育ち　恭一
社のムード明るくさした女事務　紀人
絶唱の舞台へ呼吸熱くなり　秋翠
飲み代へ唇うすい女来る　豊栄
卵酒父に神話などはない　美和子
仏壇を開けて夢見の火を灯し　星雨
親の夢子の夢何処で異うたか　海州
暖冬の犠牲になった小商　菊野
嬌声まだ残る灰皿の紅の色　窓花
独り言いって自らを慰める　白水
節分の豆にプーツが辷りこけ　紅雨
スーパーの死角ではやる店もあり　桂緑
一日のリズム崩した昼の酒　松風

小浜牧人氏急逝

小浜牧人氏が五月十日夜八時半ごろに急逝されました。氏は川柳塔社の常任理事として、または川柳塔賞の選考委員として活躍され、誰からも敬愛された作家でした。

「西宮北口句会」を主宰され、後進育成にも寝食を忘れての熱意を示めあれていたことはご承知のとおりです。

篭島総甫さんからのご連絡では、ぜん息だったそうで、まことにかえがたい方を失いました。本社句会は代選しましたが、貞山氏の喜寿祝賀の原稿は本誌発表のとおり九日朝、速達でいただきました。そして翌十日夜、永眠されたのです。　—合　掌

お　人　柄

5月13日、故小浜牧人さまの告別式には多くの柳人が浄願寺に参集しました。牧人さまのお人柄は他社の方々もぞくぞくお顔を見せてくださいました。以下順不同ですが書きもらした方があるかも知れません。

栞・小松園・形水・薫風・多久志・水客・恒明・柳志・寿馬・文秋・あいき・酔々・喜風・博泉・雀踊子・静歩・紫香・百酒・〆女・岳人・君子・総甫・智子。

不二也・郁三・舟遊・夢の虹・泰・千尋・恭子・マサ・三四子・幸子・助六・半歩・九州男・暎二・日の出・弦月・伊升・冬魚・藻介・正祐（敬称略）　（小出智子）

暑中広告受付！

本誌五分の一段が二千円
グループをおもちの方も
ご利用ください。

★原稿締切・六月末日

あなたもぜヒ一口

この寸法が四百円

川柳塔社
振替口座大阪
三三三六八番

▼二賞発表と同人総会は10月8日（日）

▼会場は昨年同様・文化会館です。

▼本社への不急のご用件は、なるべく書面でお願いいたします。午前中と夕刻以後のお電話は06—718・3218（不二田宅）へ。

本社六月句会

日時　六月七日（水）午後六時

会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話　271・3935番

柳話　菊沢小松園（今月の出題・香川静々）

兼題「暗算」板尾岳人選
「裾」宮尾あいき選
「童画」西田柳宏子選
「帽子」橘高薫風選

席題　二題　当日発表

会費　三百円　各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

7月の兼題「海苔」「網」「素質」「水中花」

募集

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「寝冷え」黒田真砂選
「甲子園」北村三歩選
「終戦記念日」若林草右選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）正本水客選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「長寿」林瑞枝選
「稲」村上春巳選
「釘」直原七面山選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

常任理事会は6月5日　5時から

定価　四百円（送料29円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十三年五月二十五日印刷
昭和五十三年六月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番通
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
郵便番号　542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話　大阪・二七一—三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

折り返し点

★ついこの間、新年号を出したのに、もう六月号か、と他誌の編集に携わる方々も、日の経つことの早いのにはあきれておられることとおもう。そして新年号がまたアッというまにやって来る。

★53年度の折り返し点から「川柳太平記」が登場。東野大八先生ご自身が乗り気なので編集部としても力強いし、ご期待にそえるものと信じこれからの仕事にハリが出てくるというもの。

★ぼくの場合、とっくに折り返し点も過ぎ、ただどうにかこうにか落伍せぬだけのことである。落伍といえば、秋田先生の逝去後、その道から落伍しつつあるのは自分ながらなさけない。

★その後は沈黙をつづけているので友だちが心配してくれている。「漫才」誌の赤字を背負いこんでいるのではないか、ということである。毎号の赤字は秋田先生お一人でかぶっていてくださったし、終刊号は黒字だったので、結局われわれ人は傷つかずだった。同人といっても十人ほどだが、なかには熱心な人がいて、次のような話がある。その名をかりにT氏として話を進めよう。

★「漫才」の同人費は三千円だった。本が出ると10冊わたしていた。つまり三百円の雑誌を10冊買ってもらっていたのである。だから9冊売って自分のを一冊残す人は、同人費が三百円で済んだわけだ。しかしT氏の場合は、その10冊がいに毎号百冊買ってくれていた。よっぽどの〝漫才〟好きということであろうか。

（本が出ると十人の同人で二百冊を捌いていたことになる）

★終刊号は五百円に値上げしたので、T氏は同人費共で五万五千円ナリを会計に入れてくれた。毎号百十冊からの雑誌をどうするのかとたずねたことがある。T氏は云う。

『知り合いの本屋さんで売ってもらっている』のだそうだ。それならかりに七掛けとしても、一冊売って百五十円の損。まるっきり残ってしまったら五百円ずつ損をするわけである。そこで七掛けで百冊わたすように云ったが、好きな漫才発展のためだから、自分のおもうようにさせてくれと云う。そしてつけ足していうことに『二、三度、飲みに行ったら三万円や五万円は遣ってしまう』と。

★秋田先生のご存命中ならいざ知らず、ぼくみたいな人間が大将になってからの終刊号にもT氏は協力してくれた。失礼だが一サラリーマンで、そんなに金を遣ったら奥さんがおカンムリだろうと思ったら『飲み食いして健康を損こねるより』ましだとのことである。この人にしてこの内助あり。口先きだけのぼくなんか、この人にはどうにも頭があがらない。

★本誌二月号へ書いた「相手のあることを考えよ」が、月刊「マスコミ文化」四月号に転載された。なお同誌の川柳選者は「川柳田園」の宮坂栄一氏である。

＊暑中広告、またよろしくお願い申しあげます。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー▲

▼家の近くに宝手山遊園地があります。明治41年に日本で最初につくられた遊園地で、今年で創立70年を迎えました。

▼そこで鳴らす音楽が風に乗って家の中へ流れて来て、ちょうどカラオケとなり、おかげで梅雨のうっ陶しい気分もふっ飛んでしまいます。

▼米国ではイライラ袋が発売されていると聞きました。欲求不満、イライラした気持ちを小さな紙袋に全部はき出し、袋の口をきつく縛って捨てるらしいのです。

▼憂鬱と喧噪はいつも背中合わせみたいですね。

カッケ（脚気）
肉体疲労時の
ビタミンB1補給に
アリナミンA
☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠
タケダ

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十三年五月二十五日印刷
昭和五十三年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六一三号

川柳塔

六月号

定価　四百円（送料・二十九円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム

サンヨー電子式卓上計算機
サコム
SACOM

見やすい設計　ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

つめたさに、おいしさをそえて……
アイスキャンデー
あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージマ店
近鉄（アベノ店・上本町店・奈良店）
京阪モール　なんば新川店　虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア　淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店

大阪・なんば
551 蓬莱
TEL (641) 0551